

[目次]

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 66 回日本生態学会大会（神戸）案内	5
第 65 回日本生態学会大会（札幌）開催報告	11
第 8 回 EAFES 国際会議名古屋大会の報告	13
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会 2018 年度定時総会、 代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項.....	14
A. 報告事項.....	14
B. 審議事項.....	25
II. 第 65 回日本生態学会大会記録.....	30
III. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について	33
IV. 規則の改訂について	34
V. 書評依頼図書.....	34
VI. 寄贈図書	34
お知らせ	
1. 公募.....	35
書評.....	35
日本生態学会役員・代議員・委員一覧.....	36
京都大学生態学研究センターニュース.....	40

日本生態学会各賞候補者募集

第17回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第23回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第12回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、各々10万円の賞金が贈呈されます。

第7回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として3名の受賞者を選考し、各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：
(郵送) 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
(電子メール) office@mail.esj.ne.jp
4. 締め切り日：2018年8月16日（木）必着

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 66 回日本生態学会大会（神戸）案内

第 66 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ66）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。詳細は次号のニューズレター又は下記の大会公式ホームページで随時ご確認下さい。

※ なお、本大会より発表および参加のあり方が大幅に変更されていますので、ご注意ください。大きな変更点として、集会の様式の統廃合（企画集会はなくなります）、自由集会のみ聴講する場合も 1,000 円の聴講費の徴収を行います。詳細は下記をご覧ください。

生態学会大会の主な変更点

シンポジウム・集会が再編されます

集会は、シンポジウムと自由集会になります。

シンポジウム	約 3 時間	招待講演ができる（Ecological Research による招待講演（ER 招待講演）を含む）
自由集会	約 1 時間半	公式行事となる（要旨が登録された発表は公式な発表とみなす） これまでの意見表明（要旨のない意見の交換、表明、ライトニングトークなど）も可能

シンポジウム、集会についての詳細は p.8 の比較表をご覧ください。

自由集会聴講が有料（1,000 円）となります

自由集会が大会の公式行事となり、自由集会のみ聴講も有料となります。そのため、大会期間中の全日程に使用可能な自由集会聴講券 1,000 円を当日販売します。

新規入会、シンポジウム、英語口頭発表賞などの事前申込が不要になります（ER 招待講演を希望するシンポジウムは事前応募が必要）

ER 招待講演を希望するシンポジウムを除いて、締め切りは 2018 年 10 月 31 日（水）23:59 に統一されます（ただし、お問い合わせの受付は締切日の 17:00 まで）。

【注意】

- ・発表申込のための生態学会への新規入会申込も、10 月 31 日（水）23:59 まで可能ですが、新規入会申込を行ってから発表申込をする必要があります（発表申込が 23:59 を超えてはいけません）。新規入会者は大会開催日までに会費を支払い、学会員となっておいただく必要があります（詳細は大会参加資格一覧の詳細をご覧ください）。
- ・ER 招待講演を希望するシンポジウムは、事前の応募締切（2018 年 8 月 31 日（金）23:59）があります（詳細はシンポジウムの募集の詳細をご覧ください）。

名札、発表タイトル、講演者名などが英語併記になります

発表タイトル、講演者名などの登録の際に、日本語、英語の両方を登録していただくことになります。

日程・会場

2019 年 3 月 15 日（金）～ 19 日（火）

神戸国際会議場・神戸国際展示場 2 号館 (<https://kobe-cc.jp/ja/>)

第 66 回日本生態学会大会（ESJ66）実行委員会

大会会長：角野康郎（神戸大学）、大会実行委員長：丑丸敦史（神戸大学）

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/66/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

新規入会・再入会申込	随時
大会参加・講演・企画など申込	締切の1ヶ月程度前から
ER 招待講演を希望するシンポジウムの事前応募	締切の1ヶ月程度前から

【締切】

ER 招待講演を希望するシンポジウムの事前応募	2018年 8月31日 (金) 23:59
シンポジウム・自由集会の企画提案	
一般講演申込	2018年 10月31日 (水) 23:59
英語口頭発表賞申込	
ポスター賞申込	
高校生ポスター発表申込	
講演要旨登録	大会の約1ヶ月前 (予定)

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※各締切日の 17:00 ~ 23:59 はお問い合わせに対応できません。様々な手順の確認はお早めをお願いします。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には対応できません。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。企画・講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員	非会員
一般講演 (口頭・ポスター) *1	○	
シンポジウム・自由集会の企画 *2	○	
シンポジウム講演 *1	○	○
自由集会講演 *1	○	
シンポジウム・自由集会のコメンテータ・意見表明 *3	○	○

*1 講演の主たる説明者を意味します。共同発表者は正会員である必要はありません。

*2 共同企画者も正会員に限ります。

*3 要旨を登録しないコメンテータや意見表明を指します。要旨登録を行う場合は「講演」となります。

- ・非会員が講演・企画を希望される場合 (シンポジウムでの招待講演を除く) は、講演・企画申込み前に学会への新規入会申込を行い、大会開催日までに会費を納入して学会員となって下さい (会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です)。
- ・高校生ポスター発表会に参加される高校生 (中学生含む) については、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧ください。
- ・非会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆としてすべてのプログラムに参加できます。
- ・自由集会のみを聴講する場合は自由集会聴講券 (1,000 円) を利用可能です。自由集会聴講券は、大会期間中複数日にわたって利用できます。ただし、自由集会と公開講演会以外のプログラムは聴講できません。

大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
- ・学部生の参加を促進するために、大会参加費の無料化を予定しています (学生証提示・当日受付のみ)。
- ・自由集会のみ聴衆として参加する場合には、自由集会聴講券 (1,000 円) を利用可能です。
 ※ESJ65 までは自由集会のみの聴講は無料でしたが、ESJ66 から有料 (大会期間を通じて使える自由集会聴講券 (1,000 円)) となっておりますので、ご注意ください。

公開講演会

日本生態学会第22回公開講演会
講演会タイトル：「迫りくる外来生物への対策と課題（仮題）」
日時：2019年3月16日（土）
会場：神戸国際会議場 / 神戸国際展示場2号館

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

シンポジウムの募集

ESJ66では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。

※大会シンポジウムを企画される方は、**ESJ66からは事前提案の必要はなくなりました。ただし、ER招待講演を希望する場合は2018年8月31日（金）23:59までの事前応募が必要**となります。

【企画内容について】

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の非会員の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の大会参加費は無料となります。ただし、同一の非会員による2年連続の招待講演はできませんのでご注意ください。
- ・ESJ66では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上をEcological Research誌による招待講演者（ER招待講演者）として採用予定です。ER招待講演者は旅費の支給を受け、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などをEcological Research誌に投稿していただくことが原則となります。
- ・若手研究者からの意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者同士の研究交流が進むことを目指して、ESJ66では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウムにおいて非英語話者の参加を促すのにも有効です）。

【応募要領】

- ・シンポジウムの応募締め切りは、**2018年10月31日（水）23:59**です。具体的な申し込み方法は次号のニュースレター、および9月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
- ・なお、ER招待講演者による講演を希望するシンポジウムは、**2018年8月31日（金）23:59**までの事前応募が必要となります。具体的な応募方法は7月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
- ・大会企画委員会は内容に関与しませんが、個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるシンポジウム企画は採択されないことがあります。
- ・上記の問題がないシンポジウム企画は、会場のキャパシティが許す限りにおいて、全て採択される予定です。

【応募の制限について】

- ・企画者（共同企画者も含む、以下同様）は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は、自由集会の企画者・講演者、一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者になることはできません。
- ・要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えませんが、そのため、要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、発表の重複制限の対象とはなりません。ただし、スケジュールの調整は行えません。

自由集会の募集

ESJ66では自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。自由集会の開催時間は約1.5時間の予定です。

※ESJ65までは、自由集会は大会の公式行事でなく関連集会でしたが、ESJ66からは大会の公式行事となり、自由集会のみ聴講も有料（自由集会聴講券1,000円）となりましたので、ご注意ください。

【企画内容と応募の制限について】

- 自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。
- 自由集会では、全体の趣旨説明と概要のほか、個別の講演の要旨も、プログラムと講演要旨集に掲載されます。
※自由集会の公式化に伴い、要旨登録を行う講演をすることが可能になりました。
- 企画者（共同企画者も含む、以下同様）は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者になれません。
- 講演者は日本生態学会正会員に限ります（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。非会員の方に招待講演をしていただくことはできません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です）。
- 自由集会の企画者・講演者は、一般講演（口頭発表もしくはポスター発表）のみ、重複して講演することができます。
- 自由集会の企画者・講演者は、シンポジウム及び他の自由集会の企画者・講演者となることはできません。
- 要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えませんが、そのための要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、発表の重複制限の対象とはなりません。ただし、スケジュールの調整は行えません。

【応募要領】

- 自由集会の応募締め切りは、2018年10月31日（水）23:59です。具体的な申し込み方法は次号のニュースレター、および9月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
- 大会企画委員会は内容に関与しませんが、個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断される自由集会企画は採択されないことがあります。

【自由集会の採否について】

- 自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。採択されなかった自由集会については、発表機会を確保するため、可能な限り代替措置を講じます。
- 開催の可否については、締め切りの約3週間後にメールでご連絡します。

大会シンポジウム・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。	様々な話題を自由に議論できる場。
開催時間	約3時間	約1.5時間
開催の優先度	最優先されます。	会場が足りない場合は抽選で採否を決定します。採択されなかった場合は、発表機会を確保するため、可能な限り代替措置を講じます。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）。	夕刻を中心に、シンポジウムの枠が空いている日時に割り当てられます。
企画委員会の関与	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	
企画者の資格	正会員	
非会員による講演	奨励します（招待講演者として参加費を免除します）。	認められません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です）。
海外からのER招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます。	なし
企画者・講演者の一般講演	不可	可
企画者・講演者の他集会の企画・講演	不可	
提案締切日	10/31（水）	
概要登録/集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	10/31（水）	
プログラムおよびweb要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。フォーラムの申し込みは各委員会代表者が行います。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りをいたしますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ66での発表募集時の分野区分については現在検討中です。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：

- ・一般講演の講演者（主たる説明者、以下同様）は、日本生態学会の正会員に限ります（共同発表者は正会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の主たる説明者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」

- ・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」を実施しています。
- ・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・第66回神戸大会においても、高校生ポスター発表会に参加した高校生と若手研究者との交流会「みんなのジュニア生態学講座」を企画します。2～3名の若手研究者に話題提供をお願いし、どのような中学・高校時代だったか、研究者を目指したきっかけは？等のエピソードも含めて、ご自身の研究を語ってまいります。質問時間を十分に設けますので、ご期待ください。
- ・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニューズレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお祈りします。

英語口頭発表賞

- ・ESJ66では、英語口頭発表枠で第6回英語口頭発表賞を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。
- ・英語口頭発表に参加される方は、一般講演（口頭発表）を申し込み際に応募してください（※事前登録はなくなりました）。
- ・2019年3月時点で博士取得後5年以内の方に応募資格があります。
- ・また、賞に該当しない「非若手研究者」の方の英語口頭発表枠での一般講演も歓迎します。ふるってご参加ください。

English Presentation Award

The English Presentation Award (EPA) aims to promote English presentations in the ESJ annual meetings and to give all participants more opportunities to share scientific ideas with international students and visiting researchers in Japan. At the same time, the EPA working group gives students and early career members an opportunity to gain experience in scientific communication, particularly experience that will be useful in international meetings. The EPA is open to students or early career researchers who have received a PhD within 5 years before March 2019. Please apply EPA when ESJ66 registration and application for oral presentations is open (It is NOT necessary to contact us in advance). We are looking forward to your application for the English Presentation Award.

ポスター賞

ESJ66では、若手の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、英語での説明を併記するなど、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ 2019

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2019 が行われます（3月20日（水）を予定）。主催はエコカップ 2019 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

第 65 回日本生態学会大会（札幌）開催報告

山本智子（大会企画委員会 前委員長）

日本生態学会第 65 回大会は、2018 年 3 月 14 日（水）から 18 日（日）までの 5 日間、札幌コンベンションセンターで開催されました。約 2300 名の参加があり、第 56 回盛岡大会以来、10 年連続で参加者が 2000 名を超えています。72 件の集会（シンポジウム・企画集会・自由集会・フォーラム）と 1,115 件の一般講演（口頭・ポスター）が行われ、高校生ポスターでは 25 校が発表しました。植物からバクテリアまで、フィールドから理論研究までと幅広い分野が一堂に会すること、参加者のうち半数以上が学生であること（高校生 123 名、学部学生の聴講 265 名を含む）は、生態学会ならではの魅力だと思います。一方で、会場の確保やアルバイトスタッフの管理、懇親会や公開講演会の運営、協賛企業や設営業者との対応など、実行委員会の皆さんには多大なご苦勞をおかけしました。献身的に運営を支えて頂き、ありがとうございました。

規模もさることながら、大会を構成する企画の多様性もまた、生態学会大会の特徴です。シンポジウム・企画集会・自由集会と 3 種類の学術集会に加えて、各種委員会が主催するフォーラムが開催され、学術面だけでなく生態学に関わる様々な課題について議論が交わされています。5 回目となる英語口頭発表賞はすっかり定着し、高校生ポスター発表とあわせて「みんなのジュニア生態学－高校生と研究者の交流会」がレギュラーに開催されるようになりました。後者は、学部学生以下の無料聴講制度とともに次世代研究者育成を目指したものです。生態学に対する社会的要請が高まるに従って、研究者だけでなく、学生、外国人、企業人、行政関係者、教育者など、様々な立場からのニーズに応える大会が求められるようになってきました。自由な雰囲気と多様性は生態学会最大の魅力だと思いますが、大会運営において、多様化への対応は大規模化への対応以上に困難を伴います。わたし自身は第 62 回鹿児島大会の実行委員長を務めさせて頂きましたが、この 3 年間で大会へのニーズはさらに多様化し、運営は複雑化したと感じています。

生態学会の大会は、担当地区会で組織される実行委員会と常設の大会企画委員会が両輪となって運営しています。講演や各種集会の受け付け、賞の運営やプログラムの編成などを企画委員会の各部会が行う事によって、実行委員会の負担を軽減し、様々なノウハウを蓄積して安定した運営を行えるようになりました。しかしながら、大会の複雑化と大規模化に伴い、個人のボランティアに依存する運営は限界を迎えています。

企画委員も実行委員も皆さんと同じ生態学会員です

大会運営のための特別な知識や技量を持つわけではなく、全員が本務の傍らボランティアで大会を支えています。

す。前回の東京大会から、会員情報の管理と参加・講演申込のためのシステムを外部委託し、個人に依存する体制からは脱却しつつありますが、一方で、生態学会大会の複雑な構造に外部のシステムを対応させなくてはなりません。自由で多様な大会の構成要素に対応し、誰もが満足する運営システムを構築すること、これには技術的な難しさだけでなく財政面での負担増があり、札幌大会では大規模な改修を見送りました。そのため、大会に参加、講演された皆さんにはご不便をおかけした点が多々ありましたが、他の誰でもなく、同じ会員が工夫して導き出した結果だと言うことをご理解頂ければ幸いです。

次期大会からは、大会の構成も含めた改革が行われます。これは、「大会のあり方検討部会」で 3 年間をかけて検討され、会員アンケート、フォーラム、総会第二部を経て、会員の皆さんからご意見を頂きながら決定に至ったものです。次期神戸大会での実現に向け、角野康郎大会会長、丑丸敦史大会実行委員長、土居秀幸企画委員長のもと、すでに準備が進められています。今後も、大会の自由度や多様性の維持と運営の効率化、財政負担の間でいくつかの選択肢を選びながら進んでいくことになると思います。

生態学会大会は神戸大会からこう変わります

外部委託と委託の内容を工夫することによって、企画委員会と実行委員会の負担をある程度軽減することができました。プログラム冊子の事前郵送を廃止するなど、更なる簡略化が図られる予定です。また、さらに大会運営の持続性を高めるため、学術集会の構造が変わります。東京大会でのフォーラム「自由集会は必要か？」をご記憶でしょうか？「短縮しても良いが必要だ」という結論でした。自由集会は公式の集会となり、企画集会がなくなってシンポジウムと自由集会の二本立てになります。開催時間や講演資格も変わりますので、大会案内をよくご確認ください。

また、ER 招待講演を希望しないシンポジウムや英語口頭発表賞などの事前エントリーをなくし、申込プロセスの簡略化が図られます。

同じシステムを何年か継続すれば、多少複雑でも定着するはずだという感触も抱いております。その意味でも、安定して使っていけるシステムを構築し、神戸大会が盛りあがることを期待しています。

謝辞

最後になりましたが、今大会の運営にあたりお世話になった以下の方々に厚くお礼を申し上げます。

日浦勉大会会長、工藤岳大会実行委員長をはじめとする大会実行委員会の皆さま、各部会長（小池伸介運営部会

長、加茂将史シンポジウム部会長、小泉逸郎発表編成部会長、池田紘士ポスター部会長、栗和田隆高校生ポスター部会長、仲澤剛史英語口頭発表部会長)をはじめとする企画委員の皆さま、学会執行部、事務局の皆さま
高校生ポスター賞と英語口頭発表賞に副賞を提供して下さった共立出版株式会社およびシュプリンガー・ネイチャー社

審査員を務めて下さった皆さま(順不同、敬称略)

ポスター賞:東若菜、石毛太一郎、伊勢武史、伊藤健彦、井上雅仁、今藤夏子、岩田高志、岩田繁英、上田実希、上原佳敏、潮雅之、梅村光俊、築村奈緒子、江副日出夫、大石達也、大石優、岡崎純子、岡田慶一、小川みふゆ、奥崎穰、小黒芳生、小野清美、折田亮、柿岡諒、笠田実、堅田元喜、片山昇、金尾滋史、北川忠生、北村俊平、京極大助、工藤宏美、工藤洋、熊野了州、倉本宣、小池文人、高原輝彦、齊藤裕美、齋藤隆実、境優、坂本信介、佐藤允昭、佐藤安弘、佐橋玄記、寒川清佳、柴田泰宙、下地博之、種子田春彦、須貝杏子、杉本太郎、高木悦郎、高津邦夫、竹内やよい、立田晴記、田辺力、頼末武史、辻かおる、辻野亮、土田さやか、土岐和多瑠、富田瑞樹、

富松元、富松裕、友常満利、直江将司、中路達郎、長田典之、中浜直之、中村彰宏、難波利幸、西野貴子、長谷川成明、服部充、濱尾章二、林健太郎、原口岳、兵藤不二夫、藤田卓、藤田知弘、藤原真己、藤本真悟、前野浩太郎、松井彰子、松井晋、松崎慎一郎、松村圭、丸山敦、丸山靖幸、水野晃子、宮崎智史、宮崎祐子、村田浩平、森口紗千子、山岸洋貴、横山真弓、吉村謙一、若松伸彦、和田哲、和田直也、渡邊謙太、このほか匿名の方28名

英語口頭発表賞:荒木希和子、安藤温子、小野田雄介、門脇浩明、川津一隆、岸田治、北島薫、北野潤、齊藤隆、佐々木雄大、杉山杏奈、鈴木紀之、田中嘉成、中村剛、彦坂幸毅、日室千尋、藤井佐織、前野浩太郎、三木健、山内敦、山尾僚、山道真人、このほか匿名の方1名

高校生ポスター賞:栗和田隆、水澤玲子、深澤遊、小口理一、宮田理恵、三宅崇、栗山武夫、馬場友希、畑田彩、嶋田正和、中田兼介、平山大輔、丑丸敦史、小林誠、土畑重人、横川昌史、松倉君子、中村誠宏、江川知花、木村恵、高木俊、片山直樹

第8回 EAFES 国際会議名古屋大会の報告

京都大学 湯本貴和

2018年4月21日～23日に名古屋大学東山キャンパスで第8回 EAFES 国際会議が開催された。EAFES は Eastern Asian Federation of Ecological Societies のことで、日本生態学会 (ESJ)、中国生態学会 (ESC)、韓国生態学会 (ESK) が輪番で2年ごとに国際会議を開催している。第1回は2004年の韓国・木浦大会で、以下2006年の日本・新潟大会、2007年の中国・北京大会、2010年の韓国・尚州大会、2012年の日本・大津大会、2014年の中国・海口大会、2016年の韓国・大邱大会と回を重ねてきた。今年は日本生態学会が主催する順番に当たっており、中部地区でお引き受けすることになって、会場を検討した結果、名古屋大学での開催となった。

当初は日本の大学では新年度に入ったばかりで、しかも3月の日本生態学会札幌大会が終わってまだ1ヶ月しかたっていないので、参加者数が少ないのではないかと懸念された。しかし蓋を開けてみれば、日中韓だけでなく、東南アジア諸国および欧米を含む合計10カ国・地域から295名の参加者、3つの基調講演、19個のシンポジウム、2つのワークショップ、132題のポスター発表、2コース(伊勢と犬山)のエクスカージョンと大盛況の大会となった。

毎回 EAFES の国際会議に合わせて、EAFES の運営会

議が開催されることになっている。日本生態学会、中国生態学会、韓国生態学会から、それぞれ2代の会長と事務局担当者の3名が出席して、EAFES の課題を検討する。日本生態学会からは占部城太郎・会長と湯本貴和・次期会長候補、中野伸一・EAFES 担当理事の3名が出席した。今大会から次回の中国大会までの2年間は、日本生態学会の占部会長が EAFES 会長として指名された。また次回の中国大会の開催候補地として、中国生態学会からは内モンゴルのフフホトが提案され、日本生態学会と韓国生態学会からの異論はなかった。

最後になったが、大会実行委員会の中川弥智子実行委員長をはじめとして、中野伸一、西田佐知子、時田恵一郎、夏原由博、半谷吾郎、野崎健太郎、土岐和多瑠、小谷亜由美、平野恭弘、長田典之の各委員のみなさん、委員ではなかったがお骨折りいただいた戸丸信弘さん、小川一治さん、手伝ってくださった32名の学生諸君、名古屋観光コンベンションビューローから派遣していただいた8名のボランティアのみなさんに篤く感謝を申し上げる。大会の設営ならびに運営がトラブルなしに順調に行われたのは、以上のみなさん方の献身的な努力があったからだということを明記したい。



開会式のあと撮影された集合写真。開会式の出席者を全員収めるために、2回に分けて撮影された。(撮影者：半谷吾郎)

記 事

I. 一般社団法人日本生態学会 2018（平成 30）年度定時総会（第 65 回大会会員総会、2018 年 3 月 17 日、代議員 18 名・委任状提出代議員 4 名・会員約 80 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2017 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 67 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	2360	2360	2410
配本部数	2360	2360	2351
残部数	0	0	59

保全生態学研究 22 巻

	1 号	2 号
発行部数	1300	1310
配本部数	1264	1264
残部数	36	46

Ecological Research Vol.32

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	2200	2200	2030	2030	2030	2030
配本部数	2017	2033	2023	2021	2020	2019
残部数	183	167	7	9	10	11

会員数

	2016 年 12 月末現在			2017 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	243	124	367	243	137	380
東北	164	94	258	170	105	275
関東	1001	330	1331	994	368	1362
中部	389	140	529	393	143	536
近畿	477	280	757	469	302	771
中四国	196	71	267	187	66	253
九州	225	69	294	222	75	297
外国	34	22	56	35	24	59
小計	2729	1130	3859	2713	1220	3933
賛助			90			85
名誉			3			3
小計			93			88
合計			3952			4021

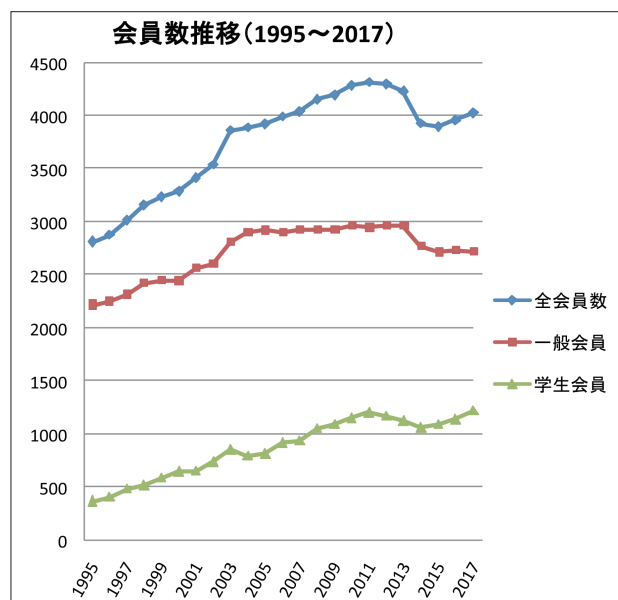
会費納入率（各年 12 月末現在）

	2016 年		2017 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	90.5	73.4	93.0	75.2
東北	93.9	73.4	90.6	75.2
関東	93.9	74.2	93.4	73.9
中部	93.1	82.9	92.6	82.9
近畿	92.2	80.4	94.5	80.4
中四国	90.8	66.2	94.1	66.2
九州	91.6	75.4	93.2	75.4
海外			88.6	59.3
全体	92.6	76.4	93.2	74.6

学会誌冊子体希望者数変遷（各年 12 月末）

年	一般					学生				
	会員数	生態誌	ER	会員数	生態誌	ER	会員数	生態誌	ER	
2008	2725	2618	96.1%	2579	94.6%	1021	941	92.2%	936	91.7%
2009	2740	2569	93.8%	2525	92.2%	1061	913	86.1%	904	85.2%
2010	2582	2261	87.6%	2163	83.8%	952	731	76.8%	713	74.9%
2011	2738	2367	86.4%	2260	82.5%	1175	836	71.1%	811	69.0%
2012	2760	2282	82.7%	2154	78.0%	1135	728	64.1%	704	62.0%
2013	2757	2226	80.7%	2078	75.4%	1097	620	56.5%	596	54.3%
2014	2765	2151	77.8%	1976	71.5%	1054	559	53.0%	526	49.9%
2015	2707	2084	77.0%	1896	70.0%	1069	547	51.2%	506	47.3%
2016	2729	2003	73.4%	1777	65.1%	1130	414	36.6%	497	44.0%
2017	2713	1883	69.4%	1659	61.2%	1220	437	35.8%	376	30.8%
2018	2617	1746	66.7%	12	0.5%	1285	357	27.8%	0	0.0%

※2013 年までは AB 会員数



b. 庶務報告（2017 年 4 月～2018 年 3 月）

1. 法務局に平成 29 年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（3 月 27 日）
2. 日本学術振興会より平成 29 年度科研費（公開講演会）について内定通知があった。交付額は 1,200,000 円（4 月 1 日）
3. 日本学術振興会より平成 29 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H25 年度より 5 年間交付、H29 年度 16,600,000 円）（4 月 1 日）
4. 日本学術振興会へ平成 28 年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4 月 12 日）
5. 「博物館とそれを支える学芸員の重要性について」の会長メッセージを学会ホームページ等に掲載した（4 月 17 日）
6. 琵琶湖賞運営委員会により第 19 回生態学琵琶湖賞受賞者森田健太郎氏と Kenneth M. Y. Leung 氏の受賞が決定した（5 月 10 日）
7. 日本生態学会へ平成 28 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（5 月 15 日）
8. 学会員対象に「大会の運営と財政の改革に関するアンケート」を実施した（5 月 22 日～6 月 12 日）

9. 日本生態学会編「シリーズ現代の生態学」の電子出版契約について著者への連絡を行った(6月5日)
10. Ecological Research の出版形態移行と冊子体購読費の変更について会員に知らせた(6月6日)
11. 2017年10月実施の選挙について郵送投票希望(8月31日必着)の受付を始めた(6月6日)
12. 特定外来生物ヒアリの侵入対策に生態学会として全面的に協力することを会長メッセージとして学会ホームページ等に掲載した(7月14日)
13. 選挙管理委員の承認を理事会メール審議で行い選挙管理委員長に半場祐子氏・選挙管理委員に松浦健二氏が承認された(8月10日)
14. 岐阜大学流域圏科学研究センター共同利用・共同研究拠点化の要望書を会長名で送ることが理事会メール審議にて承認された(8月10日)
15. 琵琶湖博物館ホールにて第19回生態学琵琶湖賞授賞式と受賞講演を行った(8月27日)
16. 琵琶湖賞運営委員会が開かれ次期運営委員候補が提案された(8月27日)
17. 次々期会長候補および次期代議員選挙の開票を事務局にて行った(11月2日)
18. 学術振興会に平成30年度科研費(国際情報発信力強化A・研究成果公开发表)計画調書など応募書類一式を送付した。(11月8日)
19. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞(鈴木賞)候補者が理事会メール審議にて承認された(12月4日)
20. 3学会連携・日本生態学会における3英文誌出版について2019年1月1日よりWILEY社より出版する覚書を交わした(12月24日)
21. Ecological Research 出版契約について2018年12月にて終了する旨をSpringer社に伝えた(12月26日)
22. Plant Species Biology の共同出版について種生物学会と覚書を締結した(1月6日)
23. 学会員の交流と将来の共同研究推進のために日本分子生物学会との覚書を締結した(1月12日)
24. 理事会より推薦された日本生態学会功労賞候補者3名(菊沢喜八郎氏・巖佐庸氏・矢原徹一氏)が代議員に承認され受賞決定となった(1月15日)
25. Population Ecology の共同出版について個体群生態学会と覚書を締結した(1月16日)

他、各種集会への後援・協賛名義使用承認8件、論文図表の転載許可2件

c. 会計報告(2017年4月～2018年3月)

1. シュプリンガーへ2017年1・2号分の出版費として3,200,400円を支払った(4月17日)
2. 科研費(国際情報発信力強化)前期分として10,000,000円の入金があった(7月5日)
3. 科研費(研究成果公開)として1,200,000円の入金があった(7月5日)
4. 科研費(国際情報発信力強化)後期分として6,600,000円の入金があった(10月30日)
5. 国際文献社へ会員管理委託費4～6月3,030,903円を

- 支払った(7月20日)
6. 土倉事務所へ日本生態学会誌67-1印刷費として879,336円を支払った(10月18日)
7. 土倉事務所へ日本生態学会誌67-2印刷費として1,672,013円を支払った(10月18日)
8. 土倉事務所へ保全生態学研究22-1印刷費として1,731,132円を支払った(10月18日)
9. 土倉事務所へニュースレターNo.42印刷費として397,613円を支払った(10月18日)
10. 土倉事務所へニュースレターNo.43印刷費として219,402円を支払った(10月23日)
11. 国際文献社へ会員管理委託費7～9月309,237円を支払った(11月14日)
12. 東京化学同人より「生態学入門2版」印税として413,840円が振り込まれた(8月25日)
13. シュプリンガー・ジャパンへEcological Research Vol.32 No.3～6出版委託費として6,315,120円を支払った(12月14日)
14. 共立出版より「現代の生態学8森林生態学」の印税として237,946円が振り込まれた(12月19日)
15. 土倉事務所へ日本生態学会誌67-3印刷費として1,106,190円を支払った(1月12日)
16. 土倉事務所へ保全生態学研究22-2印刷費として1,188,432円を支払った(1月12日)
17. コンベンションリンクージュにESJ65(札幌)会場費として5,993,370円を支払った(1月15日)
18. 国際文献社へ会員管理委託H29年10-12月経常費用803,409円を支払った(1月15日)
19. 東京化学同人より「生態学入門2版」の印税として433,720円が振り込まれた(1月25日)
20. 2017年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。(2月1日)
21. 2017年法人税として328,000円を納税した(2月7日)

2. 大会企画委員会

○一般講演・各種集会開催状況

回	開催地	ポスター	口頭	一般講演 合計	ポスター 高校生	シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	集会計
59	大津*1	1130	277	1467	35	26	5	20	32	83
60	静岡	894	211	1105	26	13	6	17	36	72
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	949	243	1192	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899*2	216*3	1115	45	19	7	17	29	72

*1 EAFES 合同大会 *2 うちポスター賞応募454件

*3 うち英語賞応募48件

○準備スケジュール

・概ね例年通りのスケジュールで進行した。

○今大会での改善点(下線は外注による省力化)

・FAQと「締め切り厳守をお願いする理由」を日英で

作成し、web 掲載

- ・集会系企画者の申し込みガイダンスを日英で作成し、大会 HP に掲載
- ・各締め切りにあわせたりマインドメールを整理し、学会事務局又は国際文献社から発送されるようにした。
- ・非会員講演者と無料参加者のカテゴリーを整理し、参加費金額と支払い方法や名札作成などをまとめた。
- ・プログラム冊子の口頭発表ページの作成に際して、整形直前の様式で国際文献社から提供されることになり、レイアウト作成の作業量が低減された。
- ・申し込みシステムの改善→一般講演の第2第3希望分野選択・ポスター・一般口頭・英語賞の選択を分かりやすく

*その他、前大会より以下を外注化

高校生ポスター申し込み・要旨登録/重複講演等申込者のチェック/正誤表作成

○今大会でのトラブル・課題（下線は申し込みシステム改善の予定）

- ・シンポジウム・企画集会の申し込みプロセスの複雑さによるトラブル・EPAの事前申し込みとその後のプロセスの複雑さ
- ・新規入会・入金と講演申し込みの締め切り日が違うことによるトラブル
- ・集会系の共同企画者の立場があいまいで重複制限の混乱があると同時に、重複チェックが手作業になってしまった（国際文献社による）。
- ・発表ファイル事前登録の失敗が10例あった→事前登録の周知不足（リマインドメールを読まず）・登録を完結させずやめてしまった

（文責：山本智子）

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2018年3月14日（水）13:30 - 15:30

場所：札幌コンベンションセンター Room H

出席者：仲岡雅裕（編集長）、陶山佳久（副編集長）、久米篤（出版担当理事）、陀安一郎（執行部）、伴修平、木庭啓介、三木健、中村誠宏、玉木一郎、富松裕、露崎史朗（以上編集幹事）

福井大、兵藤不二夫、飯島勇人、稲垣善之、石川尚人、角谷拓、梶光一、菊沢喜八郎、工藤岳、牧野渡、小林真、松崎慎一郎、中路達郎、仲澤剛史、西村欣也、大澤剛士、長田典之、斎藤琢（以上編集委員）

岡田慶一（Copy Editor）奥崎穰、中村祥子（以上、Managing Editor）山口美英子氏（シュプリングージャパン）青島裕子（Editorial Coordinator）

(1) 事務局報告

■編集状況について

仲岡編集長より、新任のあいさつの後、2017年の編集状況について説明があった。

国別投稿数については、日本が微増、中国、インドは横ばいとなっている。国別アクセプト数については5年間似た傾向で日本が最も多い。

■編集委員の交代について

新任、退任のAEiC、Editorについて仲岡編集長より紹介がなされ、負担分担や任期に関しては状況に応じて相談可能であることが周知された。

■出版社報告

シュプリングァー社山口様より、Ecological Researchの出版状況について報告があった。

トータルの投稿数は2016年469本から、昨年536で急増し、審査スピードも上昇している。1月の出版ページ数の立ち上がりが高く、年間ページ数の増加が見込まれる点、フォーラムアーティクル、アワードアーティクル、特集号の論文を中心に多くのダウンロード、サイテーションされている点等、雑誌として順調に発展していることが報告された。

(2) Ecological Research Paper Award Vol. 32 (published in 2017) 受賞論文について

・仲岡編集長より受賞論文の説明があり、今回の授賞論文は全6報あり、1報はデータペーパー、1報はBiodiversity in Asia Sectionである。いずれの論文も、出版後間がないが順調なダウンロード数、引用数の伸びがみられることが報告された。

・受賞論文のオープン化については、すでにオープンチョイスで出版されているCurrent topics in Ecologyの1本と、Data Paper（もともとオープン化）以外が今回オープン化されることになる。

(3) 2018年の特集企画について

・仲岡編集長より、現在、進行中の4つの企画について説明があった① Biodiversity and Its Ecological Functions in East-Asia and Pacific region: Status and Changesは7報出版済み、② Climate Change and Biodiversity Conservation in East Asia as a token of memory for 7th EAFES in Daegu, Koreaについては今月出版予定である。③ Ultramafic Ecosystems: Proceedings of the 9th International Conference on Serpentine Ecologyと④ Phenology in the tropics: ultimate causes and physiological controls revealed by long-term monitoring and predictive modelsは順調に掲載準備が進んでいる。

(4) Springer社との出版契約の終了について

・久米出版担当理事より、Springer社への感謝の意が表され、契約終了となることが伝達された。

(5) 3英文誌合同出版について

・久米出版担当理事より、国際情報発信力強化と編集コスト削減のための合同出版について説明がなされた。3誌合同出版により、さらにアジア地域の生態学の基盤雑誌としての地位確立を図っていく。

準備としては、ERのプラットフォームがEditorial ManagerからSIMに移行するに当たり、8-9月ごろ両方のシステムを使う必要があることについて、編集委員への協力が呼びかけられた。

(6) その他

・Guidelines for data papersの一部改訂について

データペーパーの出版基準の改訂の経緯と改定内容が、仲岡編集長より、説明された。

・意見交換

新任や若手の Editor の要望や疑問、審査の判断基準、査読や最終判断の Editor 名公表の可否等についての意見交換がなされた。

(文責：仲岡雅裕)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：2018年3月14日(水)

出席者：伊東明、永光輝義、名波哲、小林剛、村岡裕由、高田宜武、草刈秀紀、東樹宏和、今藤夏子、三宅崇、伊藤貴子(土倉事務所)、鈴木晶子(編集事務)

a. 投稿、審査状況(2018年3月9日現在)

	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集 受付	特集		学術 情報	学術情 報特集	意見	連載
			受理	却下	審査 中		受理	審査 中				
2018	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2017	3	8	4	4	3	1(7編)	0	1	2	0	1	4
2016	10	4	8	3	3	2(14編)	2(14)	0	2	3(18編)	0	6

b. 刊行状況

68巻(2018年)刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	学術情 報特集	連載	その他・ 記事	合計	頁数
68巻1号	1	1	0 (0編)	1	0 (0編)	2	2	7	80
計	1	1	0 (0編)	1	0 (0編)	2	2	7	80

67巻(2017年)刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	学術情 報特集	連載	その他・ 記事	合計	頁数
67巻1号	3	1	0	1	0	2	1	8	74
67巻2号	2	1	1(7編)	1	1(7編)	0	0	18	192
67巻3号	0	2	1(7編)	0	0	2	0	11	108
計	5	4	2(14編)	2	1(7編)	4	1	37	374

c. 新連載について

①連載：生態教育の今と未来(第68巻1号より掲載開始)
生態学教育専門員会で担当(編集委員会での担当：三宅 崇 編集委員)

②特集連載：地球環境問題と環境行政50年～生態学(者)が果たしてきた役割～(今後、掲載予定)
(編集委員会での担当：草刈秀紀 編集委員)
(文責：伊東明)

5. 保全生態学研究刊行協議会

a. 報告事項

<2017年報告> 編集状況

2017年1月～12月(2017年12月15日現在)

	原著 論文	総説	調査 報告	実践 報告	解説	保全 情報	意見・ その他	計
新規投稿	12	0	8	3	4	2	0	29
投稿→受理	6	0	5	1	3	2	0	17
投稿→却下等	0	0	0	0	0	0	0	0
審査中	6	0	3	2	1	0	0	12

最近のトピック：情報不足に挑戦する保全科学

22巻1号(2017年5月)

特集：天野達也ほか：保全科学が挑む情報のギャップ

天野達也：保全科学における情報のギャップと3つのアプローチ

石濱史子：標本情報等の分布推定への活用と実際：バイアスの除去から精度評価まで

大澤剛士：保全科学におけるデータギャップの現状と解消に向けた取り組み

大澤隆文：研究-実務間ギャップ：自然環境政策が必要とする科学的情報・知見とは？

23巻1号(2018年5月)

特集：横溝 裕行ほか：不確実性下における効果的な哺乳類管理

栗山 武夫ほか：密度推定に基づいたタヌキに対する外来哺乳類(アライグマ・ハクビシン)の影響

飯島 勇人：特定計画から見る都道府県におけるニホンジカ管理の現状と課題

長田 穰ほか：状態空間モデルへのベジアンモデル平均の適用：イノシシ個体群の増減要因を探る

山村光司：ベイズ推定法の適切な活用について-エゾシカ個体数推定の例-

横山真弓・高木俊：被害防止対策から得られるデータを活用した兵庫県におけるツキノワグマの個体群の保全管理

<2018年計画>

J-Stage 掲載労力軽減・迅速化(引用文献 h-index 対策等)

Web 登録→XML 登録を検討

著者サービス向上 審査高速化(博士論文の受け皿に)

(文責：小池文人)

6. 自然保護専門委員会

日時：2018年3月14日(水) 11:15～13:15 場所：札幌コンベンションセンター(Room102)

出席委員：現委員17名：露崎、紺野、黒沢、星崎、吉田、和田、野間、井上、内貴、増澤、横畑、阿部、常田、村上、角野、水谷、須賀 オブザーバー：亘(新委員)、奥山(新委員)、可知会長

a. 確認事項

当学会における委員会の位置づけについて

b. 審議および承認事項

- ①2017年度活動費支出（1～12月）報告および2018年度活動費予算
2017年度活動費 52,960円（アフターケア活動費および事務経費）
2018年度予算 100,000円（アフターケア活動費）
- ②新委員の選任（地区選出委員）および専門別委員の分野名変更
関東地区選出：亘悠哉・奥山雄大 中国・四国地区選出：伊谷行
「自然公園・エコツーリズム」⇒「環境政策（自然公園／種の保存法）」（吉田正人）
「環境行政」⇒「環境政策（外来種）」（村上興正）
- ③地区会との連携について
意見書・要望書の提出にあたって地区会と連携を強化
- ④次期役員選出
委員長：吉田正人 副委員長：和田直也 幹事：須賀丈
次々期役員・委員の選出方法について：来年度の委員会会で再検討
- ⑤作業部会・アフターケア委員会について
・アフターケア委員会を設置してない意見書等についても、担当者を決め、フォローアップを継続

c. 報告事項

- フォーラム開催 第64回大会（東京）フォーラム「日本の絶滅危惧種とその生息地を守るために何をすべきか？」（2017/3/16）
- 要望書提出
 - ・北海道石狩海岸で海岸植生から内陸までの自然の連続的変化を唯一残す地に大型風力発電計画「銭函海岸における風車建設の中止を求める意見書」（2017/6/5）北海道知事宛・（2017/6/7）銭函ウインドファーム株式会社社長宛提出
着工される（2017/11）
 - ・京都府亀岡市アユモドキ繁殖地のスタジアム計画変更
第3回アユモドキ保全に関する六者合同意見交換会及び現地視察（日本生態学会自然保護専門委員会、日本魚類学会自然保護専門委員会、WWFジャパン、日本自然保護協会、日本野鳥の会、京都府、亀岡市）（2017/7/24）
- 作業部会・アフターケア委員会報告
 - ・外来種検討作業部会
 - ・淀川問題検討委員会
 - ・上関要望書アフターケア委員会
 - ・石狩海岸風車建設事業計画アフターケア委員会
 - ・中池見湿地アフターケア委員会
 - ・濃飛横断自動車道路アフターケア委員会
 - ・辺野古・大浦湾問題
- その他
リニア新幹線の残土置き場・メガソーラーによる希少種の生息地への影響を今後注視

（文責：吉田正人）

7. 外来種検討作業部会

日時：2018年3月14日9時～11時

場所：札幌コンベンションセンター 102会議室

出席者：村上・池田・五箇・斉藤・常田・増澤・森本・横畑・佐藤・可知

議題：

1. 新規委員の選出：下記の6名の方々を新規委員として承認。
鳥類：橋本琢磨（自然環境研究センター）
鳥類：佐藤重穂（森林総研） 昆虫：苅部 治紀（神奈川県立生命の星・地球博物館）
昆虫：岸本年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム）
魚類：上原一彦（大阪府立環境農林水産総合研究所）
植物：安田泰輔（富士山科学研究所）
2. 新規委員長選出
次期委員長に五箇公一氏を選出 現委員長との交代は1年後か遅くとも2年後とする（引き継ぎ内容等の検討を行い次期委員会に諮る）
3. 特定外来生物の追加指定
哺乳類ではクマネズミ、ハクビシンが候補となるがクマネズミでは家屋等のクマネズミの扱い、ハクビシンでは農業被害が顕在化しているが生態系被害が科学的に検証不十分で見送られている。国内外来種のイタチの生態系被害は顕在化しているので、この管理問題が重要。その他の分類群でも必要な時に論議。
4. 今後の部会の活動内容
とくに外来生物ハンドブックの内容について論議。
2002年の外来種ハンドブックは外来生物法を策定せよというメッセージを強く出した。外来生物法が施行されてから、外来生物の防除の成功例や失敗例を取り上げて、現時点での総括をおこなうことと、各種取り組みの成果を公表し、普及啓発に資することが重要との意見は一致。
5. その他
外来種防除の取り組み事例について、下記の現状報告と論議を行った。
アライグマ：池田、白山のコマクサ：増澤、アルゼンチンアリ：五箇、村上、淀川の外来水草の防除、京都府の外来種調査、ヌートリア等：村上
魚釣島：横畑 詳細は省略。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

日時：2018年3月14日（水）11:15-13:15

場所：札幌コンベンションセンター Room K（101）

出席予定者（敬称略）：北島、粕谷、酒井、奥田、五箇、田中、佐竹、立木、小泉、森長、奥田、黒川、彦坂、佐藤、石川、辻、占部（オブサーバ）、大澤（オブサーバ）

欠席予定者（敬称略）：巖佐、中丸、三木、塩尻、土居、大串

以下の議題に関し議論した。

1. 日本の生態学のさらなる国際化への取り組み
・日本語バリアフリー化の中間報告（『学術の展望』）

- ・英語口頭発表賞等の円滑な運営のための課題
- 生態学者が一丸となって大型予算を獲得するためのサポート
 - ・国際共同プロジェクトにおけるリーダーシップ
 - ・地球研プロジェクトへの応募
 - ・学会会議マスタープラン 2020
 - 若手支援策と会員数減少対策
 - ・学会内メンター
 - ・生態学に関する大学院合同説明会
- 考えをまとめた後、生態学会に順次提言する予定。
(文責：辻和希)

9. 生態学教育専門委員会

1) 理事会承認案件

委員長の交代 西脇亜也(宮崎大) → 畑田 彩(京都外大、任期 2018.4-2020.3)

2) 報告事項

① 2017 年度活動報告

- SSH 生徒研究発表会(8/8-9)で西脇委員、丑丸委員、宮田委員、三宅委員、広瀬委員が生態学会と生態学教育専門委員会のブース発表。
- 日本生態学会誌 68 巻(2018)より連載「生態学の今と未来」開始。
- 生態学教育専門委員会合宿(9/23-24)キョロロ「生態学会誌連載・フォーラム企画・生態教育データベース」他 参加者:丑丸、嶋田、中井、中田、西脇、平山、広瀬、三宅、小林、畑田
- 生態教育データベースの運用:校閲システムの試行

② 本大会での打ち合わせ報告

日時:2018年3月14日(水)13:30~17:30
場所:103 会議室
出席:嶋田、平山、畑田、三宅、占部(オブザーバー)
欠席:丑丸、小林、澤邊、中井、中田、西脇、広瀬、三宅、宮田

- 高等学校学習指導要領について確認
(生物科学学会連合 第17回定例会議での宮下さんによるメモから抜粋)
高等学校学習指導要領(都築功 日本生物教育学会)
 - ・今年度末に新指導要領の改訂版が出される。
 - ・生物の重要用語を現行の約2000語から200-250語(生物基礎:共通科目)、500語(生物:選択科目)にしぼることを明示。
 - ・生物(選択科目)では、進化の項目が最初に。
 - ・思考力と探求力の育成を重視。
→物理、化学に比べて、生物の重要用語は多すぎた。生物=暗記科目という印象を与えているのはそのため、重要用語を絞ることは賛成だが、何が残されたのかチェックは必要。残された重要用語のリストを確認する作業が今後できれば。
- 「生態学とは何か」リーフレットの作成について
 - ・オブザーバーの占部先生より、今までほとんど行われてこなかった広報活動を今後重点的に行って

いく予定との説明あり。中川弥智子さん(名古屋大)が広報担当に。学会誌の出版会社が変わり、種生物学会、個体群生態学会の学会誌との一元化の結果、予算が1/10になり、浮いた予算の一部は広報に使いたいとのこと。

- ・1-2年かけて、じっくり検討し、意見を出してもらいたい。現時点では、HPに一般市民向けのページを設け、質問受付をしようかという案が出ている(占部さんの案?)。回答を割り振るのは生態学教育専門委員会。回答者はポスドクから募る。Payも出る。回答者は専門家に問い合わせるなどして、回答を作るところまでが仕事。
- ・嶋田さんより、SSH研究発表会で配布する「生態学とは何か」を説明するリーフレットを作っようかとの提案あり。占部さんから事務局鈴木さんに話を通していただけることになり、今年度のSSH研究発表会で配布できるよう制作することになった。

(3) 高校生ポスター賞審の確認

3/17 10:00-17:00(コアタイム 10:00-12:00)

委員の中で、嶋田、畑田、中田、小林、平山、丑丸が協力する

(4) フォーラムの確認

2018年3月18日 12:00-14:00 フォーラム U06(D会場)

「アクティブ・ラーニングと生態教育~効果編~」

司会:中井咲織、アンケート担当:平山大輔

昨年の生態教育フォーラム「アクティブ・ラーニングと生態教育~実践編~」の議論を受け、今回のフォーラムでは、アクティブ・ラーニングの効果とは何か、効果をどのように測るかを学びたい。フォーラム前半では3人の話題提供を行い、後半は、フロアからの質疑応答も交えたパネルディスカッションを行う。

演者:畑田 彩(京都外大)・佐賀達矢(多治見高校)・美馬のゆり(公立はこだて未来大学)

(文責 畑田 彩)

10. 生態系管理専門委員会

日時:2018年3月14日 9時~11時00分

場所:札幌コンベンションセンター K会場

出席者:鎌田、松田、橋本、西田、西廣、白川、中越、津田、角野、中村

1. 2017 年度活動報告

1) 生態系管理演習の開催

平成29年8月18日-19日 兵庫県神戸市・芦屋市にて実施。9名の参加を得た。

実施内容、受講者の満足度についてはいずれも良好であったが、開催日程がお盆休みに重なったこと、2016年度と比較して受講料を倍額にした(5000円→10000円)にしたこともあり、受講者数充足率が半減したこと(90%→45%)に対し、改善すべきという指摘があり、次年度は開催日程、広報のあり方、CPDプログラム導入などの対応を検討することとした。

2) 生態系管理講習会の開催

平成 29 年 11 月 17 日 沖縄県国頭郡金武町公民館にて「億首川マングローブ林の保全と活用」を実施。55 名の参加を得た。

http://www.esj.ne.jp/esj/Shizen_saisei/2017_okinawa.pdf
講習会資料として、億首川マングローブ林の生態調査結果をとりまとめた冊子を配布し、今後の保全と活用の議論のための地元参加者から感謝の言葉が多く寄せられた。

3) 「特定外来生物のヒアリ類に対する緊急のおよび継続的な対策に関する要望書」の提出（鎌田）

要望書が根拠となり、ヒアリ対策の政策が推進されている現状について報告があり、委員会として一定の成果を示せていることが確認された。

4) 後援

下記の 2 件について後援した。

・フォーラム「海岸林から考えるふるさと・里浜の復興デザイン」

2018 年 2 月 24 日（土）12:30～16:00 @東北学院大学土樋キャンパス

主催：「生態系サービスの享受を最大化する「里浜復興シナリオ」創出」プロジェクトチーム

・ワークショップ「日本的アグロエコロジー」

2018 年 2 月 12 日（月）11:00～17:30 @龍谷大学大宮キャンパス

主催：日本有機農業学会、龍谷大学経済学部、総合地球環境学研究所

5) アフターケア活動（講習会を実施した場のその後について）

麻機遊水地（静岡県、西廣）および宝が池（京都府、鎌田）での現状について情報提供を行った

2. 2018 年度活動方針

1) 2018 年度委員構成について

*役員・代議員・委員一覧参照

2) 生態系管理専門委員会内規について

生態系管理専門委員会の内規（案）を再確認し、第一回理事会に提出することとした。

3) 生態系管理演習（橋本）

四万十川で 7 月末に実施する方向で検討を進めること、企画者を山下、橋本、白川の 3 名とすることが了承された。

4) 生態系管理講習会（鎌田）

開催の候補地が定まっていないため、引き続き委員会の中で提案を求めることとした。

5) 今後の委員会のあり方について（鎌田）

■グリーンインフラ、Eco-DRR の動向

・国内外の動向について西田委員、中村委員、松田委員から情報提供があり、これら動向と委員会活動と関連づけることの必要性が確認された。

■生態系管理専門委員会のオープン化について議論された

・委員会構成員の流動性の担保→委員の公募制の導入などの検討
・メーリングリスト等による情報共有システムの構築

■生態系管理専門委員会としての戦略的な行動計画の必要性について議論された

- ・生態系管理専門委員会として具体的に取り組むべき事項を明確
- ・国の施策へのインプットのあり方
- ・生態系管理の場における生態学と周辺領域との関係性
- ・保全誌を通じての委員会の方針や考え方についての提案と共有
→これらのことについて検討するための会議を別途開催することとした。

（文責：鎌田磨人）

11. 大規模長期生態学専門委員会

出席者：日浦、中村、黒川、中野、伊東、木庭（オブザーバー）

欠席者：仲岡、石原、正木、三枝、大手

議題

・次期委員会メンバー

*役員・代議員・委員一覧参照

・マスタープラン 2020 2019 年 2 月頃締め切り

生態学研究センター中心に作成 叩き台今秋作成、その後委員会等で改訂

・後継者不足の各地に散らばっているモニタリングサイト（例えば個人が設定した長期森林プロット）の維持システムを検討

→既にいくつかの大学で行われているものを参考にシニア向けプログラムを開発、対象はシニア大学・自然観察保護員など

各地区会で担当し、地区会費を一部充てることを

・アイデアペーパー枠を ER に提案したい

報告

・委員会主催ランチョンフォーラム 16 日 11:45 - 13:45

・ILTER 年次総会、ILTER-EAP 会議、JaILTER-OSM を合同開催

2018 年 10 月 15 - 19 日 台中

（文責：日浦勉）

12. 野外安全管理委員会

日時：2018 年 3 月 14 日 13:30-15:00

場所：札幌コンベンションセンター 203 会議室

出席者：飯嶋、石原、大館、奥田、粕谷、北村、鈴木

2017 年度活動報告

・野外調査安全管理マニュアル出版準備状況

図・写真の準備がほぼ終了し、原稿の最終チェック段階。転載許可（救急救命法）。完成稿を提出し転載申請する。

・64 回大会でのランチョンセミナー、ポスター掲示
東京大会でランチョンセミナーを実施。参加者は約 50 名。

ポスターの縮刷版の希望があり送付。

・65 回大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を進めた。

・2017 年度に起きた事故事例について意見交換をした。

2018 年度活動予定

- ・野外調査安全管理マニュアル出版
転載許可が得られた時点で投稿する。
- ・第65回大会でランチョンセミナーとポスター展示
ランチョンセミナーを3月16日に実施する。ポスター展示も行う。
- ・第66回大会でのランチョンセミナーとポスター展示
の準備を行う。
参加者によりアピール力の大きい形式を検討する。
- ・事故情報の収集と集約
引き続き、野外調査、実習中の事故や冷やりハッと事象の例を収集し、解析を続ける。該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。

(文責：鈴木準一郎)

13. キャリア支援専門委員会

2018年3月14日 13:35～15:40 札幌コンベンションセンター (Room 102)

出席者

委員：中坪、木村、鈴木(智)、鈴木(牧)、曾我、高村、西田、別宮、水野

新委員(4月1日-)：小柳、小山、森田

オブザーバー：可知、半場、深谷

議題

- 札幌大会での企画について
 - ・男女共同参画ランチョンフォーラム「めざせ！仕事の効率アップ&スマートなラボ運営～ワークとライフの狭間で～」(3月15日)
 - ・キャリア支援フォーラム「多様な職場で自然を研究する」(3月16日)
 - ・企業パンフレット展示(23団体)
 - ・託児室・ファミリー休憩室(実行委員会)
- 来年度の委員について
 - *役員・代議員・委員一覧参照
- 来年度の活動計画について【担当者】
 - ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加(年4回程度)【木村・曾我・鈴木(智)】
 - ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加(10月13日)
学協会シンポ用ポスター作製 大規模アンケートの新しいデータを入れ込む
 - ・女子中高生夏の学校(8月9日～11日)実施予定【鈴木(智)・黒瀬・小柳・小山】
 - ・第4回大規模アンケート(第4回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査)の生態学会部分の解析と公表 解析中【水野・三宅】和文誌の学術情報への投稿を検討
 - ・年大会時の参加者の属性調査 解析中【水野・木村・別宮】和文誌の学術情報への投稿を検討
 - ・キャリア支援専門委員会メーリングリスト【水野】、Pukiwiki管理【鈴木・小山・(水野)】
 - ・キャリア支援専門委員会HP 新しいHPに関して生態学会事務局鈴木さんと相談【中坪・半場】※

4. 神戸大会に向けた準備【担当者】

- ・男女共同参画ランチョンフォーラム 実施予定 内容は今後検討【木村・小柳・小山】
- ・キャリア支援フォーラム 実施予定 内容は今後検討【上野ほかキャリア担当者】
- ・企業パンフレット展示
- ・託児室・ファミリー休憩室 学会事務局(橋口さん)と連絡をとる
- ・こども生態学講座 地元NPO、博物館等の情報を収集する【西田】

報告事項

- 2017年度のキャリア支援専門委員会の活動について
 - ・Gender Summit 10(ニューズレターNo.43)
 - ・男女共同参画学協会連絡会(ニューズレターNo.44)
 - ・男女共同参画学協会シンポジウム
 - ・女子中高生夏の学校(資料あり)
 - ・キャリア支援活動・男女共同参画活動に関わるアンケートの解析
 - ・委員会HPの運営、メーリングリスト、Pukiwiki管理
 - ・私立中高・理系教員選考会への参画(日本物理学会、日本天文学会、日本生態学会主催)

以上。

※補足：大会期間中(3/15)事務局の鈴木さんとの間でHPに関して話し合いを行い、新しいデザインのHPを作成し、はじめにトップページを鈴木さんが作成し、それを委員会で検討することとした【出席者：可知・木村・鈴木(智)・中坪・別宮・水野+鈴木(事務局)】

(文責：中坪孝之)

14. 電子情報委員会

出席 竹中(委員長)、久保、大澤

報告事項

- サーバ移行の状況について確認した。学会で契約しているレンタルサーバ(以下、学会サーバ)を、ハード・ソフトともに老朽化し更新の見込みがなく、いろいろ不具合も生じている現サーバから新サーバ(conohaの仮想専用サーバ)へと移行作業を行っている。レンタル料金は軽減される予定。ML等、現在のサービスがそのまま引き継がれる。作業は外部委託(ITコンサル)。すでに両サーバがミラーリングされている状態にある。4月中にDNSを切り替える。その際は事前に事務局から各委員会等に連絡し、当日は念のため更新を抑えることを依頼する予定である。
- 今後の持続可能な管理のありかたを検討した。切り替え後、1年間の運用状態を見て、学会事務局で対応すること、電子情報委員会で対応すること、外注が必要・可能なこととそのコストを整理することとした。その結果により、委員会の解散も検討することとした。その場合、サーバ管理の知識がある会員になんらかの形で相談役的な役割を担っていただくことも考えられる。(文責：竹中明夫)

15. 大会のあり方検討部会

経過報告

- ・大会運営における現状認識と課題、および改革方向性について、2016年3月の仙台大会総会第2部にて報告した。齊藤隆会長（当時）より、改革の考え方3点が示された。①学会・大会の魅力を高める、②運営の負担を減らす、③健全な予算構造の確立。
- ・2016年4～5月に実施した第1回会員アンケート結果をもとに、大会改革案（試案）を作成し、大会のあり方検討部会と理事会から意見収集した。
- ・大会運営電子システムを管理運営している国際文献社にヒアリングし、システム変更もしくはヘルプデスク（人）対応で、改革対応が可能であることを確認した。
- ・東京大会にて、フォーラム「U08: 学会大会の改革：自由集会は必要か？」（3月18日（土）12:00～13:00 A会場）を開催し、会員から意見収集を行なった。
- ・2017年5月に実施した第2回会員アンケートの結果、2017年7月理事会での意見を受けて、大会改革案を修正した。
- ・2017年9月に大会のあり方検討部会の面談会議を行い、大会改革案をさらに修正した。
- ・2017年12月理事会にて、大会改革の方向性が承認された。
- ・2018年1月国際文献社と大会改革の実施に向けた打合せを実施し、システム改革に関する見積を依頼した。
- ・2017年2月理事会にて、大会改革案が承認された。

大会改革案（20180217案）

【各種集会について】

- （新）シンポジウム・（新）自由集会・フォーラムの3種類に簡素化する。大会企画委員会シンポジウム部会などの業務量を減らしつつ、初めて集會を企画する会員にもわかりやすい構造とする。当初の改革案では自由集會は廃止を検討していたが、フォーラム・第2回会員アンケートの結果を受けて、（新）自由集會として復活させた。
- （新）シンポジウムの詳細は下記とする。
 - ◇ 3時間枠。
 - ◇ 大会企画委員会による企画内容への関与・審査は廃止する。ただし、特定の個人や団体を誹謗中傷する内容などがなければ審査する（これまでの企画集會や自由集會と同じ）。
 - ◇ 企画申込期日は、一般講演や（新）自由集會と同じ頃に設定。企画は、会員のみ可とする（現状通り）。
 - ◇ ERシンポの応募は現状を継続する。
 - ◇ 非会員による講演を奨励し、招待講演者（企画者による招待をすべて受け入れる）として大会参加費を免除。ただし、同一非会員の2年連続講演は不可。非会員講演者を1年目に仮会員登録し、2年目以降は、（年会費を支払えば）会員として発表可能となる。
 - ◇ 他の講演や企画との重複は不可。
- （新）自由集會の詳細は下記とする。
 - ◇ 1.5時間枠（シンポジウムの時間帯に自由集會が2件入る時間設計）

- ◇ 講演のタイトル・要旨が登録可能な、公式の講演を可能とする。タイトル・要旨の登録は「可能」だが「必須」とはしない。そのため、発表者が当日まで明かされていないようなディスカッションやライトニングトークなども、これまでと同様に企画可能。加えて、従来の企画集會のような集會も企画可能（ただし、開催時間は1.5時間。より長い時間を望む場合はシンポジウムを企画してもらう）。発表者を企画概要で明示しているような従来の自由集會も、講演のタイトル・要旨登録なしで企画可能。
- ◇ 企画は、会員のみ可とする（現状通り）。
- ◇ タイトル・要旨が登録された講演が公式の講演であり、会員のみ可能とする。非会員による講演は認めない。また、タイトル・要旨が登録されないコメントや意見表明などは公式な講演ではなく、会員・非会員の別を問わず可能。
- ◇ 自由集會のみ聴講可能な、自由集會聴講券を発行（複数日の自由集會を聴講可能、会員も非会員も購入可、1,000円、当日発行のみ）し、一般市民など非会員が自由集會に参加しやすくする。
- ◇ 代議員会の開催時間に自由集會を割り付ける場合は、代議員会出席者リスト（学会事務局が作成）と自由集會企画者・講演者リスト（国際文献社が作成）の照合を国際文献社が行い、代議員会出席者が企画・講演する自由集會は、代議員会開催時間に予定しないよう調整する（従来通り）。ただし、調整ができない場合は、学会執行部に判断を委ねる。
- フォーラムは現状を継続するが、委員会活動との関連が理解されやすい内容とするよう、配慮する。
- 各種集會（シンポジウム、自由集會、フォーラム）の採択可能な上限数は、事前策として10会場以上確保できる大会会場を選ぶほか、大会実行委員会と協議の上（実行委員会の負担可能な範囲内で）、会場使用時間をできるだけ長くとり、収容可能上限数を最大化する。それでも全ての集會企画を収容できなかった場合は、下記の順番で対応する。1) 学会執行部にフォーラムの開催時間などの調整を依頼し、会場使用時間を確保する。2) 自由集會企画の採否を抽選で行う。ただし、採択されなかった自由集會の発表機会を確保するため、可能な限り、代替措置を講じる。3) 学会執行部の判断に委ねる。

【一般講演について】

- 口頭発表およびポスター発表は、現状を継続する。
- 会員のみ発表可とする（現状通り）。
- 口頭発表用ファイルの事前登録を継続（技術的な発展の状況を見ながら、事前登録廃止を今後検討）
- ポスター発表賞は現状を継続するが、審査方法の簡素化を可能な範囲で進める（企画委員会ポスター部会に一任）。

【講演・企画の重複制限について】

- 重複が可能（一人2件まで）なのは、一般講演（口頭発表またはポスター発表）と自由集會（講演または企

画)の組合せのみとする。

- 各種集会の企画または講演は、重複できない(2つのシンポジウムの重複不可、2つの自由集会の重複不可、シンポジウムと自由集会の重複不可(ただし、自由集会でタイトル・要旨を登録しないコメントや意見表明は、講演とカウントされない。シンポジウムと自由集会が同じ時間帯に開催されることもあるがプログラム調整はしない。))
- (再掲)タイトル・要旨が登録された講演が公式の講演であり(会員、もしくは、非会員のシンポジウム招待講演者(最初の1年のみ可で2年連続は不可)が講演可能)、タイトル・要旨が登録されない趣旨説明、コメント、意見表明などは公式な講演ではない。

【スケジュールの例について】

- 09:00-12:15 シンポジウム1件、または、自由集会2件(入替時間15分)
- 12:15-14:15 ポスター発表(コアタイム)
- 14:15-17:15 一般口頭発表、または、シンポジウム1件
- 17:30-19:00 自由集会1件
- 自由集会を1.5時間とし、シンポジウムと自由集会の重複企画を制限することで、これまでと同程度の数の集会系企画を収容可能、と見込んでいる。

【総会・授賞式・受賞講演について】

- 総会および授賞式は、現状通り、大会中にプレナリーで開催する。
- 受賞講演は、プレナリーで実施する方向性を維持する。
 - ◇生態学会賞の受賞講演を実施する(20~25分程度)
 - ◇鈴木賞・宮地賞・大島賞の受賞講演は、現状通りに実施する。
 - ◇受賞者数が多く受賞講演の時間が不足する場合は、止むを得ず、鈴木賞の受賞講演を自由集会とパラレルで実施することとする。

【未来の生態学者の拡大について】

- 学部学生以下の大会参加費は、現状通り、免除する。
- 高校生ポスター発表会は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会高校生ポスター部会に一任)。
- ジュニア生態学講座は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会高校生ポスター部会に一任)。

【国際化について】

- 英語口頭発表賞は継続するが、運営可能な範囲で実施する(企画委員会英語口頭発表賞部会に一任)。
- 英語による講演が全ての時間帯で開催され聴けるよう、英語発表数の増加を検討するとともに、プログラム編成において留意する。

【公開講演会について】

- 公開講演会の開催は、現状通り、実行委員会を中心に企画し実施する。
- Web配信することを検討する。

【プログラム冊子について】

- 冊子の事前発送を取りやめ、大会受付での当日配布とする(運営負担の低減と冊子配送費の節約のため。学会のほかの冊子も配送を取りやめる傾向にある)
- オンライン版の公開は現状通りとし、大会に参加しない会員も含めて、会員一斉メールでオンライン版公開の案内を送る
- 大会受付での配布方法の詳細は今後検討するが、簡素で効率的な方法とする(例、冊子受取専用の机を用意し、大会参加証(名札)を見せて受取り。一人一冊の厳格なチェックは省略。大会申込システムで「プログラム冊子受け取り希望」ボタンをつくり、印刷部数を見積もる)
- 非会員の大会参加費を、会員より1,000円高く設定する(プログラム冊子の配布費用を含む)

【託児所・ファミリー休憩室・企業出展協賛について】

- 学会事務局が中心となり、実行委員会・企画委員会と協力して運営する。

【会場内Wi-Fi環境について】

- Wi-Fi環境を恒常的に整備する(大会会場で設置可能な限り)。

【大会会計について】

- 大会参加費・懇親会費などは、現状通り、実行委員会と理事会が相談して決める。学会財政との関連については、今後も検討を続ける。

【企画委員会のリクルートについて】

- 大会企画委員会メンバーの公募を、大会企画委員会で検討してもらう(第2回アンケート結果によると、ボランティア意識のある会員は多数いることがわかった)

現システムの改修

- ・大会改革に伴うシステムの改修のほか、現システム(入会申込・大会参加登録の手続き、集会系企画の申込プロセス、EPAの申込プロセス)についても改修する。

スケジュール

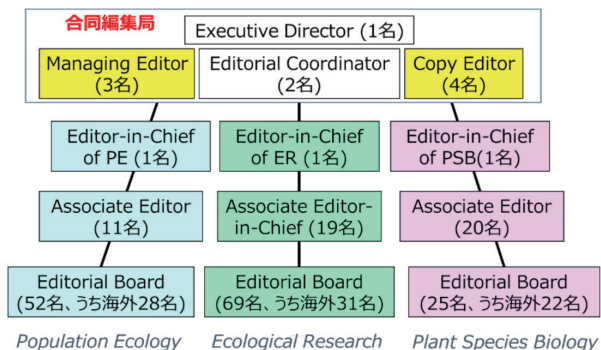
- 2016年
 - 8月~11月 改革具体案の検討
 - 12月 理事会(改革案の審議)
- 2017年
 - 3月 東京大会にて、フォーラム開催
 - 4月~ アンケート第二回の実施と分析、改革案の修正
 - 7月 理事会(改革案の審議)
 - 12月 理事会(改革案の審議)
- 2018年
 - 2月 理事会(改革案の審議)
 - 3月 北海道大会にて、代議員会・総会にて報告
 - 4月~ 近畿大会に向けて実施

(文責:吉田丈人)

16. 3 学会英文誌の共同出版について

- ・日本からの生態学関係科学の国際情報発信と国際的なプレゼンスを向上させ、サステナブルな学会出版環境を構築するために、生態学会は2019年より Ecological Research 誌 (ER) に加えて、現在、個体群生態学会から出版されている Population Ecology 誌 (PE) と、種生物学会から出版されている Plant Species Biology 誌 (PSB) の出版を行います。
- ・ER 誌は生態学の全分野をカバーするアジア随一の国際誌であり、PE 誌は動物の個体群生態学・進化生態学および理論生態学を主に扱い、PSB 誌は植物の生活史や種生物学を主な掲載対象としています。これら雑誌の関係者の多くは日本生態学会の会員でもあります。各誌の編集・出版は独立して行われており、3誌間で論文内容についての重複はかなり少ない状況です。しかし、出版社も異なり広報活動も独立していたため、編集・出版経費など、各学会の運営における大きな負担になっていました。
- ・生態学会を通じて3誌を一括契約することで出版事業のスケールメリットが生まれ、出版社への支払い額が大幅に削減され、学会の運営のための経済的基盤を強化できます。また、出版契約だけでなく出版業務についても包括的な交渉が可能になりました。
- ・出版管理 (論文の受付、投稿原稿の形式・内容確認、受理原稿の図表確認など) や広報等を3誌で集約して行うことにより、編集作業の効率と質が向上し、出版に携わる人材が確保しやすくなるともに、編集委員の負担が軽減されます。
- ・3誌は日本生態学会を通じて出版されますが、各誌の編集体制は各学会が独立した編集組織を持って行い、雑誌の形態はほとんど変わりません。しかし、イギリス生態学会やアメリカ生態学会と同様に3誌を集めたポータルサイトを構築する予定です。
- ・各学会の会員は追加経費負担無しに、3英文誌の電子版を自由に読むことができます。

出版形態は基本的に電子版のみですが、印刷体を希望する会員には有料で冊子による配布も行います。



(文責：ER 編集担当理事 久米 篤)

17. 学会財政改革について

(2017年3月東京大会総会報告資料より)

1. 学会誌とニュースレターの冊子体印刷・配送を廃止する (ただし、学会誌の冊子体を希望する会員にはオンデマンド印刷により有料配布。非会員の定期購読は継続。ニュースレターは会員に一斉メール送信)。※
 2. 年度予算の繰越金 (地区会費を除く) が3000万円を下回る場合、単年度収支の赤字額は、原則として大会参加費予算の増額により補てんする。
 3. 正会員の会費は、一般が現行の平均水準 (11700円) を超えない額とし、学生は一般の半額程度とする。
 4. 賛助会員の会費は、生態誌と保全誌の冊子体購読費等に基づき、別途、定める。
 5. 低収入の国に在住する会員に対する優遇措置を検討する。
 6. 民間からの寄付を受け付ける窓口を設置する。
 7. この改革案は札幌大会総会で決議し、2019年1月より施行する。
- ※冊子体廃止の導入効果は、ER (東京大会で導入の可否を決議) で300万円、生態誌で150万円、ニュースレターで50万円の支出削減 (保全誌は未定)。

2018年3月時点での進捗状況

1. ER とニュースレターの冊子体の印刷・配送は廃止済み。生態誌と保全誌に関しては、財政状況を見ながら検討中。
2. 現状で繰越金 (地区会費を除く) は3000万円以上。
3. 学生会員の会費等は、科研費の採択状況を考慮して検討する。
4. 賛助会員については、第5号議案で提案。
5. 低収入対象者の枠組みを理事会で検討中。
6. 民間からの寄付を受け付ける窓口を2017年12月16日付けで生態学会ホームページに設置した。
7. 1. 3. 5. の検討事項は精査の上、神戸大会総会に提案する。

(文責：陀安一郎)

18. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会

監事 竹中明夫・岡部貴美子

当法人の2017年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2017年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、2018年2月1日に学会事務局において会計書類を閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款

に違反する重大な事実はない。

(3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場意義なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員（任期：2016.3 総会後～2018.3 総会まで）

理事：可知直毅、占部城太郎、久米篤、長谷川雅美、大澤剛士、川北篤、近藤倫生、佐竹暁子、鈴木まほろ、辻和希、日浦勉、別宮有紀子、宮下直、湯本貴和、吉田丈人、吉田正人

監事：竹中明夫

- ・辞任する役員（2018.3 総会まで）

理事：伊東明

- ・理事会推薦役員候補者（任期 2018.3 総会後～2020.3 総会まで）

理事：占部城太郎（再任）、湯本貴和（再任）、中川弥智子、久米篤（再任）、吉田丈人（再任）、巖佐庸、丑丸敦史、内海俊介、大澤剛士（再任）、佐竹暁子（再任）、鈴木まほろ（再任）、陶山佳久、東樹宏和、中野伸一、西廣淳、宮下直（再任）、可知直毅（再任）、

監事：粕谷英一

- ・（参考）上記以外の任期中の役員（任期：2017.3 総会後～2019.3 総会まで）

理事：陀安一郎（専務理事）、木庭啓介（庶務担当）、北村俊平（会計担当）

監事：岡部貴美子

- ・正会員の投票による理事兼代表理事・会長候補者
占部城太郎

第2号議案 2017年度事業報告決算に関する件

当期（自2017年1月1日至同年12月31日）における決算について満場意義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
費目	17 予算	17 決算	費目	17 予算	17 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	29,400,000	28,435,100	ER	12,700,000	11,927,528
正会員（学生）	7,000,000	6,875,500	生態誌	4,500,000	2,712,039
賛助会員	1,900,000	2,006,000	保全誌	2,000,000	2,048,564
地区会費	700,000	783,200	ニュースレター	1,000,000	817,506
小計	39,000,000	38,099,800	ER 英文校閲・翻訳	2,500,000	2,274,924
ER 売上還元金			ER 誌 Open Access 経費	3,000,000	3,074,972
学会誌売上げ	1,000,000	1,020,600	和文誌編集費	700,000	453,707
小計			小計	26,400,000	23,309,240
科研費			会議費	100,000	80,072
国際情報発信強化 A	16,600,000	16,600,000	旅費・交通費	3,000,000	3,099,600
公開講演会	1,300,000	1,200,000	人件費	14,580,000	13,359,951
小計	17,900,000	17,800,000	地区会活動費	2,000,000	2,548,737
出版印税	1,000,000	1,002,657	大会支出	23,000,000	25,982,796
広告代	180,000	180,000	公開講演会	1,400,000	1,400,237
著作権使用料	400,000	454,210	INTECOL 会費	450,000	0
大会収入	23,000,000	21,945,550	事務費		
講習会費	100,000	170,500	通信費	450,000	471,804
その他	20,000	3,695	消耗品費	300,000	153,002
前年度繰越金	78,618,032	78,618,032	雑費	200,000	166,160
			決済代行手数料	650,000	875,966
			レンタルサーバ料	480,000	420,120
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	100,000	42,655
			小計	3,860,000	3,809,707
合計	161,218,032	159,295,044	各種委員会費	2,250,000	2,854,583
			選挙費	950,000	264,294
			EAFES 費用	200,000	11,420
			講習会費	300,000	484,334
			会員管理委託費（経常）	4,500,000	4,380,797
			大会運営委託費（初期）	1,400,000	1,900,800
			Web 選挙（初期）	700,000	432,000
			法人税	400,000	328,000
			次年度繰越金	75,728,032	75,048,476
合計	161,218,032	159,295,044	合計	161,218,032	159,295,044

単年度収入	82,600,000	80,677,012	単年度支出	85,490,000	84,246,568
			単年度収入 - 単年度支出	-2,890,000	-3,569,556

<特別会計>

宮地基金（準備金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	17 予算	17 決算	費 目	17 予算	17 決算
前年度繰越金	1,127,879	1,127,879	宮地賞賞金	445,480	445,480
預金利息	0	8	雑費	2,160	2,160
			次年度繰越金	680,239	680,247
合 計	1,127,879	1,127,887	合 計	1,127,879	1,127,887

大島基金（準備金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	17 予算	17 決算	費 目	17 予算	17 決算
前年度繰越金	8,513,010	8,513,010	大島賞賞金	222,740	222,740
預金利息	0	71	雑費	1,080	540
			次年度繰越金	8,289,261	8,289,801
合 計	8,513,010	8,513,081	合 計	8,513,010	8,513,081

鈴木賞基金（準備金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	17 予算	17 決算	費 目	17 予算	17 決算
前年度繰越金	4,344,673	4,344,673	鈴木賞賞金	150,000	150,000
預金利息	0	36	雑費	1,620	1,620
			次年度繰越金	4,193,053	4,193,089
合 計	4,344,673	4,344,709	合 計	4,344,673	4,344,709

貸借対照表

平成 29 年 12 月 31 日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)	円	(負 債 の 部)	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現 金 及 び 預 金	118,028,718	未 払 金	3,755,599
前 渡 金	160,000	未 払 法 人 税 等	328,000
前 払 費 用	925,930	前 受 金	35,800,700
仮 払 金	540	預 り 金	428,913
		固 定 負 債	
		退 職 給 付 引 当 金	3,753,500
		負 債 合 計	44,066,712
		(正 味 財 産 の 部)	
		一 般 正 味 財 産	75,048,476
		正 味 財 産 合 計	75,048,476
資 産 合 計	119,115,188	負 債 ・ 純 資 産 合 計	119,115,188

第3号議案 2018年度予算に関する件

次期（自2018年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場意義なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
費目	17決算	18予算	費目	17決算	18予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	28,435,100	28,000,000	ER	11,927,528	5,550,000
正会員（学生）	6,875,500	6,800,000	生態誌	2,712,039	3,000,000
賛助会員	2,006,000	1,900,000	保全誌	2,048,564	2,200,000
地区会費	783,200		会誌発送費用		2,000,000
小計	38,099,800	36,700,000	ニュースレター	817,506	400,000
科研費			ER 英文校閲・翻訳	2,274,924	1,500,000
国際情報発信強化A	16,600,000	14,000,000	ER誌 Open Access 経費	3,074,972	3,000,000
公開講演会	1,200,000	1,200,000	和文誌編集費	453,707	500,000
小計	17,800,000	15,200,000	小計	23,309,240	18,150,000
学会誌売上げ	1,020,600	1,000,000	会議費	80,072	100,000
出版印税	1,002,657	1,000,000	旅費・交通費	3,099,600	3,000,000
広告代	180,000	200,000	人件費	13,359,951	14,000,000
著作権使用料	454,210	300,000	地区会活動費	2,548,737	2,500,000
大会収入	21,945,550	22,000,000	大会支出	25,982,796	22,000,000
EAFES 収入		7,000,000	公開講演会	1,400,237	1,200,000
講習会費	170,500	100,000	INTECOL 会費	0	900,000
寄附金		0	事務費		
その他	3,695	5,000	通信費	471,804	500,000
前年度繰越金	78,618,032	75,048,476	消耗品費	153,002	200,000
			雑費	166,160	200,000
			決済代行手数料	875,966	1,000,000
			レンタルサーバ料	420,120	600,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	42,655	100,000
			小計	3,809,707	4,280,000
			各種委員会費	2,854,583	2,500,000
			選挙費	264,294	0
			EAFES 費用	11,420	7,000,000
			講習会費	484,334	300,000
			会員管理委託費	4,380,797	4,500,000
			大会運営委託費（初期）	1,900,800	
			Web 選挙（初期）	432,000	
			法人税	328,000	400,000
			次年度繰越金	75,048,476	77,723,476
合計	159,295,044	158,553,476	合計	159,295,044	158,553,476

単年度収入 80,677,012 83,505,000 単年度支出 84,246,568 80,830,000

単年度収入－単年度支出 -3,569,556 2,675,000
 (科研費国際発信力強化採択)
 単年度収入－単年度支出 -11,325,000
 (科研費国際発信力強化不採択)

<特別会計>

賞準備金（各賞準備金を統合した場合）

収入の部			支出の部		
費目	17決算	18予算	費目	17決算	18予算
前年度繰越金		13,163,137	賞金		
預金利息		0	宮地賞		334,110
			大島賞		111,370
			鈴木賞		150,000
			小計		595,480
			雑費		3,780
			次年度繰越金		12,563,877
合計		13,163,137	合計		13,163,137

第4号議案 役員・代議員選任規則の改訂に関する件

役員・代議員選任の改訂案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場意義なくこれを承認可決した。

第二章 役員

第2節 役員(会長・業務執行理事・理事・監事)

【現行】

(業務執行理事の選任)

第11条 業務執行理事(専務理事1名、庶務担当理事1名、会計担当理事1名、【編集】担当理事3名、次期会長候補1名)は、理事会において理事が互選によって選任する。業務執行理事の選任にあたっては、会長からの推薦のあった業務執行理事候補者を参考とすることができる。

【改訂案】

(業務執行理事の選任)

第11条 業務執行理事(専務理事1名、庶務担当理事1名、会計担当理事1名、【業務】担当理事3名、次期会長候補1名)は、理事会において理事が互選によって選任する。業務執行理事の選任にあたっては、会長からの推薦のあった業務執行理事候補者を参考とすることができる。

第5号議案 入会及び会計規則の改定に関する件

入会及び会計規則の改訂案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場意義なくこれを承認可決した。

一般社団法人日本生態学会入会及び会費規則(案)

第1条 本法人の入会については、本法人の定款に定められたことのほかは、この規則による。

第2条 本法人の会員になろうとする者は、入会申込書に所定の事項のすべてを記入し、当該年度の会費を添えて、所定の窓口へ提出しなければならない。

第3条 入会に際し、全ての入会希望者は、正会員、賛助会員のいずれかから会員資格を選択するものとする。

第4条 既納の会費(送金手数料を含む)は、いかなる事由があっても返還しない。ただし、理事会が入会を承認しなかったときは、入会申込書に添えて提出された当該年度の会費は、これを返還する。

第5条 本法人の会費については、本法人の定款に定められたことのほかは、この規則による。

第6条 会費は当該会計年度の間、年額の全額を納入しなければならない。

第7条 会費は、年額を分割して納入することができない。

第8条 本法人の会員の会費は、次に掲げる基本会費、冊子体購読費、地区会費の合計額とする。

	基本会費	冊子体購読費* (送料込)	地区会費**	大会発表	選挙・被選挙権 (代議員)
正会員(一般)	9500円	①: 8000円 ②: 600円 ③: 2000円	0円	○	○
正会員(学生)	6500円	①: 8000円 ②: 600円 ③: 2000円	0円	○	○
賛助会員(個人・団体)	年会費(購読誌) 20000円(①・②の冊子体) 22000円(①・②・③の冊子体)		0円	×	×
名誉会員	0円	0円	0円	○	×

* 冊子体購読誌

本法人の会員には、希望があれば次の学会誌の冊子体を有料(冊子購読費)で配送する。

- ① ER: Ecological Research (年6回発行)
- ② 生態誌: 日本生態学会誌 (年3回発行)
- ③ 保全誌: 保全生態学研究 (年2回発行)

** 地区会費

総会で決定した金額とする。

第9条 本法人では所得の少ない正会員(一般)のために、以下の要件をすべて満たす場合には、本人の申請に基づいて翌年度の年会費を正会員(学生)と同額にする措置を実施することができる。

①年間所得が200万円以下

②申請時点で当該年度の学会費が納入済である事

第10条 本法人の非会員に向けた学会誌(冊子体)の

定期購読料は、以下に掲げる年額とする。なお、Ecological Research の定期購読は、出版社との契約事項により、本法人では受付けない。

①日本生態学会誌 9000 円

②保全生態学研究 5000 円

第 11 条 この規則の改訂は総会の承認を得なければならない。

附 則

①この規則は、平成 26 年 1 月 24 日から施行する。

②この規則の改訂は、平成 30 年 1 月 1 日から施行する。

第 6 号議案 第 68 回大会（2021 年）担当地区会に関する件

第 68 回大会（2021 年）担当地区会候補中国四国地区の提案があり満場意義なく承認可決した。

第 7 号議案 名誉会員に関する件

菊沢喜八郎会員の名誉会員推薦について提案があり、満場意義なく承認可決した。

Ⅱ. 第 65 回日本生態学会大会の記録

第 65 回日本生態学会大会は札幌コンベンションセンターを会場として 2018 年 3 月 14 日～3 月 18 日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム 19、フォーラム 7、企画集会 17、一般講演（口頭発表）216、一般講演（ポスター発表）899、高校生ポスター 45、自由集会 29、ジュニア生態学講座が行われました。参加者は 2,306 名でした。5 日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日 程

3 月 14 日 代議員会、各種委員会（大会企画委員会、Ecological Research 刊行協議会、日本生態学会誌刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会、大会あり方検討部会）、自由集会

3 月 15 日 シンポジウム、企画集会、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム

3 月 16 日 シンポジウム、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、懇親会

3 月 17 日 総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演（ポスター発表）、高校生ポスター、ジュニア生態学講座、自由集会

3 月 18 日 公開講演会、シンポジウム、企画集会、フォーラム

ポスター賞受賞者

<動物と植物の相互関係>

【最優秀賞】

「滑る花卉：蜜腺露出型の花に見られる新しい盗蜜者排除機構」* 武田和也、川北篤（京都大学）

【優秀賞】

「虫媒花における、花色と形態の相関進化－送粉者相の異なる 5 地域間の比較－」* 角屋真澄、辻本翔平、久保田将裕、渡邊裕人、伏黒陽大（富山大学）、平岩将良、丑丸敦史（神戸大学）、工藤岳（北海道大学）、石井博（富山大学）

<生物多様性>

【最優秀賞】

「なぜ巻貝は殻に藻をつけるのか？ホスト巻貝の体温を安定させる藻類の保水機能」* 香川理、千葉聡（東北大学）

【優秀賞】

「二次草地の植物群集に対する景観構造と土壌を介した土地造成の履歴の影響」* 都築洋一（東大・農）、小柳知代（学芸大・環境セ）、中島一豪、宮下直（東大・農）
「環境 DNA メタバーコーディングから得た矢作川の魚類群集構造の季節変化と周辺環境との関係」* 芝田直樹（龍谷大・院・理工）、佐藤博俊（龍谷大・理工）、山本大輔、山本敏哉（豊田市矢作川研究所）、櫻井翔（龍谷大・院・理工）、山中裕樹（龍谷大・理工）

<動物群集>

【最優秀賞】

「トレンドとイベントから成る長期環境変動に対するプランクトン群集の応答：年縞堆積物を用い過去に遡る」* 大竹裕里恵（東大・総合文化）、大槻朝、占部城太郎（東北大・生命）、木村成子（滋賀県大・環境）、山田和芳（ふじのくに地環史博）、吉田丈人（東大・総合文化）

【優秀賞】

「ニホンヤマビルの遺伝的多様性と地理的変異」* 森嶋佳織（東京農工大学大学院）、逢沢峰昭（宇都宮大学）
「全球の島における鳥類共起パターン：生態的形質と生息環境の影響」* 佐藤恵里、村上正志（千葉大・院・理）
「フンと安定同位体から読み解くネコ・ネズミ・ミズナギドリ捕食－被食関係の季節動態：御蔵島の事例」* 安積紗羅々（東大・農）、岡奈理子（山階鳥類研究所）、亘悠哉、中下留美子（森林総合研究所）、宮下直（東大・農）

「寄主植物の共有が日本列島に分布するチョウ類の共起パターンに与える影響」* 橋本洸哉（京大生態研（現近大））、中臺亮介（琉球大・理）、岩崎貴也（神奈川大・理）、佐藤安弘（龍谷大・さきがけ）

<動物繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「Sr 同位体比分析によるトミヨ属の同所的生息地における生息塩分濃度の差の解明」* 札本果（京大生態研）、石川麻乃、北野潤（遺伝研）、申基澈、陀安一郎（地球研）

【優秀賞】

「抱卵するコケゴロモガキ *Ostrea circumpicta* の性システム」* 安岡法子、安田恵子、遊佐陽一（奈良女子大院）
「宿主依存的な卵形の進化：タナゴ類の系統種間比較からの検証」* 林寿樹（福井県大・海洋）、北村淳一（三重県博）、小北智之（福井県大・海洋）

<動物個体群>

【最優秀賞】

「玉座の数は血縁度が決める：単為生殖アリにおける最適繁殖者数」* 井戸川直人、土畑重人（京大院・農・昆虫生態）

【優秀賞】

「琉球列島のアンキアライン洞窟におけるカワアナゴ属魚類の感覚器の特殊化」* 小林大純（琉大院理工、琉大熱生研）、前田健（OIST）、山平寿智（琉大熱生研）

<行動>

【最優秀賞】

「オスの貯食行動は性選択によって進化した？—モズは「はやにえ」を食べてメスの誘引に重要なさえずりの質を高める—」* 西田有佑（大阪市大・院・理）、高木昌興（北大・院・理）

【優秀賞】

「菌食性ナメクジのキノコ胞子散布力」* 北林慶子、都野展子（金沢大学）

「北太平洋のアカウミガメ亜成体は高い休止代謝速度によって越冬時に活動的な潜水を行う」* 木下千尋、福岡拓也、植崎友子（東大大海研）、新妻泰章（名城大学）、佐藤克文（東大大海研）

「オサムシ類2種と陸棲巻貝の捕食被食行動」* 榎本尊、山田寛之（北大・水産）、和田哲（北大・院・水産）

<保全>

【最優秀賞】

「絶滅危惧植物エンピセンノウの保全：日韓中露の集団遺伝、保全株の由来、植え戻し計画、生態展示」* 田村紗彩（北大・院・農）、Kwak, Myoung-Hai（韓国国立生物資源館）、國府方吾郎（国立科学博物館/植物）、Park, Chan-Ho、Lee, Byoung-Yoon（韓国国立生物資源館）、福田知子（三重大/教養教育機構）、Elena Pimenova、Ekaterina Petrunenko、Inna Koksheeva、Pavel Krestov（ウラジオストク植物園）、Svetlana Bondarchuk（シホテアリニ州保護区）、Ma, Jin-Shuang（上海辰山植物園）、Zhou, Hai-Cheng（長白山保護管理中心）、坪井勇人（白馬五竜高山植物園）、西川洋子、島村崇志（道総研）、富士田裕子、中村剛（北大・FSC・植物園）

「サンショウウオの幼生・成体期を統合した生態系横断的な個体数決定機構の解明」* 高木香里、宮下直（東大・農）

【優秀賞】

「水田管理と周辺環境が水生昆虫群集に与える影響」* 渡辺黎也（筑波大・生物学類）、日下石碧、横井智之（筑波大・院・保全生態）

「Effect of Soil Conditions at Reintroduction Site on Growth and Reproduction of an Extinct Aquatic plant Species in the wild, *Eriocaulon heleocharioides*」* 段雨佳（筑波大学・生命環境）、堀内勇寿（埼玉県所沢市）、長谷川セリ（筑波大学・生命環境）、永田翔（アクアキャンプ）、上條隆志（筑波大学・生命環境）、田中法生（国立科博・植物園）

「草原として都市に残存する空き地の価値評価」* 高橋栞（東邦大学理学研究科）、徳江義宏（日本工営（株））、

今村史子（日本工営（株））、上野裕介（石川県立大学）、西廣淳（東邦大学理学部）

「ライチョウの集団遺伝構造とその規定要因」* 坂本大地（九州大学）、長太伸章（国立科学博物館）、中村浩志（中村浩志国際鳥類研）、西海功（国立科学博物館、九州大学）

<物質循環>

【最優秀賞】

「How does logging influence biogeochemical silicon cycling in lowland tropical forests in Borneo?」* Ryosuke NAKAMURA (Kyoto Univ.), Nobuo IMAI (Tokyo NODAI, Kyoto Univ.), Ryota AOYAGI (STRI, Kyoto Univ.), Kanehiro KITAYAMA, Kaoru KITAJIMA (Kyoto Univ.)

【優秀賞】

「暖温帯コナラ林とアカマツ林における根圏滲出物の季節変化」* 本多朝陽、新海恒、増田信悟、墨野倉伸彦（早稲田大・院・先進）、友常満利、小泉博（早稲田大・教育）

「ボルネオ熱帯山地林におけるミミズ糞塊生産による窒素・リンの可給化」* 中野正隆、横山大稀、北山兼弘（京大・農・森林生態）

<群落・遷移・更新>

【最優秀賞】

「降水量操作下における植物群集の機能的多様性パターン」* 高鳥友樹（横浜国大・理工）、高木勇輔、岡田慶一（横浜国大・環境情報）、小林真（北海道大・FSC）、森章（横浜国大・環境情報）

【優秀賞】

「気候特性から見た北東アジアにおけるチョウセンゴウの分布変遷」* 福井俊介、上條隆志、設楽拓人（筑波大学・生命環境）、松井哲哉（森林総合研究所）

<植物個体群・繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「チガヤにおける種内F1雑種の劇的な開花期シフトによる生殖隔離メカニズム」* 野村康之、下野嘉子、水野信之（京大・院・農）、佐藤和広（岡山大・資源植物研）、富永達（京大・院・農）

【優秀賞】

「アブラナ科多年草ハクサンハタザオにおける葉面クチクラワックス量の標高二型」* 湯本原樹、本庄三恵（京大・生態研セ）、佐々木結子、太田啓之（東工大・生命理工学院）、工藤洋（京大・生態研セ）

「オオイヌタデの防御形質二型維持機構としての負の頻度依存選択と環境不均一性の検証」* 松田浩輝、白濱祥平、徳田誠（佐賀大・農）

「一回繁殖型多年生草本オオウバユリの繁殖特性 - 種子繁殖と栄養繁殖の寄与に関する集団間比較 -」* 大嶋希美、早船琢磨、大原雅（北海道大学環境科学院）

「キツリフネにおける遺伝的・生態的に分化した3タイプの発見」* 三原龍太郎（信州大学大学院）、市野隆雄（信州大学）、篠原義典（エース（株））

<植物生理生態>

【最優秀賞】

「冷温帯ブナ林における細根動態の経年変動：マステイニングにともなう細根生産への資源分配機構」* 仲畑了

(京都大学農学研究科)、大澤晃(京都大学農学研究科、京都大学地球環境学堂)、植本正明、佐藤雅子、水永博己(静岡大学農学研究科)

【優秀賞】

「葉齢に伴うケイ素の蓄積は葉の光合成速度と関係するののか?」* 梶野浩史、北島薫(京都大学農学研究科)

「葉の老化段階における呼吸速度と老化進行速度の関係」* 竹原巧、北山兼弘(京大・農・森林生態)

<進化>

【最優秀賞】

「ゲノムワイドに探る種間交雑に伴う淡水カジカの適応進化」* 伊藤僚祐、三品達平(京大院・理)、武島弘彦(東海大・海洋)、渡辺勝敏(京大院・理)

【優秀賞】

「共生による宿主のニッチシフトが共生者の伝達様式の進化におよぼす影響」* 内海邑、大槻久、佐々木顕(総研大・先導研)

「多様な繁殖様式を持つカジカ科魚類における交尾行動と精子競争に関係した精子の平行進化」* 伊藤岳(新潟大学大学院)、安房田智司(大阪市立大学大学院)

<生態系管理>

【最優秀賞】

「都市近郊の里山環境の公園利用は農業利用の代替利用となりえるか? :生物多様性の観点から」* 岩知道優樹、内田圭(横浜国立大学)、丑丸敦史(神戸大学)、横田樹広(東京都市大学)、佐々木雄大(横浜国立大学)

【優秀賞】

「福井県三方湖におけるヒシ分布の時空間動態と塩分濃度の関係:温暖化による海面水位上昇が淡水水生植物に与える影響」* 石川みくり(東大院・総合文化)、石井潤(里山里海湖研究所)、西廣淳(東邦大学理学部)、瀧本岳、宇野文貴(東京大・農学部)、吉田丈人(東大院・総合文化)

「房総半島南部におけるアライグマの利用環境」* 廣瀬未来、長谷川雅美(東邦大学)

「外来カワマスの遺伝的構造:近年の個体群衰退は低い多様性が原因か?」* 福井翔(北大・環境科学)、小泉逸郎(北大・地球環境)

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】

「ヒダサンショウウオの産卵行動と越冬幼生が現れる要因を探れ!」* 三宅遥香(岐阜県高富中/生物部)

「自然栽培田は赤とんぼの避難場所になるか?」* 大藪愛紗(金沢泉丘高校)、野村進也、西川潮(金沢大・環日セ)

「ハリガネムシの生態に関する研究」* 渡部真衣、山本真椰、吉岡李紗(愛媛県立今治西高校)

「フギレデンジソウの研究 ~小葉が”ふぎれる”しくみの解明~」* 前田萌絵、坪倉妃那(清心女子高等学校)

【優秀賞】

「環境DNAを用いた長良川・揖斐川の魚類の分布解析」* 土田康太、常川光樹、廣瀬雅恵、坂井雄祐、日下部綾音、都竹優花(岐阜県立岐阜高等学校)

「キノコ栽培の生産力向上に廃材は有効か?」* 赤枝みのり、川島夕夏、佐藤衣吹(清心女子高等学校)

「カワニナ属に寄生する吸虫類の環境要因による寄生状況の比較」* 三浦健太郎(海城中学高等学校)

「糞の質は糞虫の繁殖に影響するか?」* 古川勇氣人、西山弘和、杉本賢人、杉浦友哉、中出雄翔、高橋諒介(北海道稚内高等学校)、住岡凜々花(稚内市立稚内中学校)

「カワニナの研究~殻の環境変異の法則に迫る~」* 水根一起、仁科正徳、西田俊哉、木田大貴(岐阜県立岐山高等学校)

【審査員特別賞】

「守れ!ふるさとのカミサンショウウオIX~GISと環境DNAを用いた生息地の未来予想~」日下部綾音、坂井雄祐、土田康太、都竹優花、多和田光葉、深山遥誉、山口萌、横山光海、中村日南、河野有香、常川光樹、廣瀬雅恵、村瀬めぐり(岐阜県立岐阜高等学校)

「都市部におけるノゲシとオニノゲシの分布と生活史戦略」* 佐々木洸大、國武剛毅、園田拓巳(海城中学高等学校)

「秋田県のため池における水生植物の生態と埋土種子集団に関する研究」* 秋山実希、片桐浩司(秋田中央高校)

「一回繁殖型多年生植物オオウバユリの生活史」* 日浦響子、坂井柊紀(北海道北広島高等学校)

「くらしで違う海鳥のホネ -カモメ3種とウトウの骨と塩類腺の比較-」* 住岡凜々花(稚内市立稚内中学校)

「未来につながる花酵母」* 澤田彩生、竹島ありさ(清心女子高等学校)

「糞虫の個体密度は繁殖に影響するか?」* 西山弘和、古川勇氣人、杉本賢人、杉浦友哉、中出雄翔、高橋諒介(北海道稚内高等学校)、住岡凜々花(稚内市立稚内中学校)

「アフリカツメガエルの食餌別にみた発生の違いとカニバリズムの影響」* 西嶋龍太郎(福岡県立城南高等学校)

【ナチュラルヒストリー賞】

「ミシシippアカミミガメに貯精嚢はあるのか?」* 豊田英里(清心女子高等学校)

「ボルネオオランウータンの代理母は子供の面倒をみるのか?~血縁の有無が母子関係に与える影響~」* 黒田峻平、田村祐也、山根柊聖、越川峻乃介(海城中学高等学校)

「光質・塩濃度・水温から考察するサンゴの成長に最も適する環境」* 杉浦美帆、都築寛源、村松澄香(玉川学園高等部)

「国内外来種トノサマガエルが北海道の在来種アマガエルに与える脅威 ~アマガエルを救うために~」* 佐藤元拓、吉田野乃、齊藤駿太、細川俊哉(北海道北広島高等学校)

「宮城県に生息するメダカのルーツを探る」* 栃木陽太、大塚慎也(仙台第一高等学校)

「多摩川水系秋川におけるヒガシシマドジョウの形態変異と外来シマドジョウの侵入の可能性」* 三内悠吾(海城中学高等学校)

「埼玉県内の河川における外来生物カワリヌマエビ属の侵入」* 清水花衣、飛田結衣、田畑明日香、松尾雪乃(埼

玉県立川越女子高校)

- 「新舞子干潟におけるハクセンシオマネキ *Uca lactea* の生態」* 石原統哉、大谷空、川口隼斗 (兵庫県立龍野高等学校)
- 「廃校及び周辺地域におけるアライグマの調査」* 加藤慎吾、岡田征也、越野拓洋、小林徹、森田也真人 (埼玉県立坂戸西高校)
- 「外来植物の駆除を目指したキノコ栽培」* 中山和音、平田望紗 (清心女子高等学校)
- 「エゾサンショウウオ幼生の先天的役割」* 二川原湧、根来晃佑 (立命館慶祥高等学校)
- 「環境 DNA を用いて宮城県のメダカの生息状況を探る」* 大塚慎也、栃木陽太 (仙台第一高等学校)
- 「奈良県のナヨクサフジの分布拡大要因とその影響」* 三宅隆裕、森下秀一郎、山本浩大 (奈良教育大学附属中学)
- 「輪厚川の底生魚フクドジョウとウキゴリ類の生態研究」* 岩館美沙、藤井朔、井田旅、矢録雅樹、吉田啓人 (北海道北広島高等学校)
- 「外的環境が与える活動量への影響」* 藤川丈太郎、小松黎良 (立命館慶祥高等学校)
- 「色覚制限によるヒメウズラへの影響」* 菅野琴音、酒井玲奈 (加古川東高等学校)
- 「狭い孤立林に生息するホンダヌキの食性の季節変化～東京都練馬区武蔵学園における調査～」* 飯島昌弘 (私立武蔵高校)
- 「ナメクジの嗜好性について」* 木村真里恵、西鼻架乃 (加古川東高等学校)
- 「オオイタサンショウウオにおける共食い発生のメカニズム」* 太田成実 (清心女子高等学校)
- 「静岡市巴川流域における外来種と在来種の競合関係 - 淡水カメ類に注目して -」* 松永みなみ、遠藤知海、山口小麦、織田梨菜、秋澤俊希、篠崎奏 (静岡北高等学校)
- 「アブラムシ防除における最適条件」* 橋本真諭、北野智詩 (立命館慶祥高等学校)
- 「南宮山のニホンジカに関する生態学的調査」* 古田未来、多賀雅弥、中根源太 (岐阜県立不破高等学校)
- 「ドジョウ *M. anguillicaudatus* とカラドジョウ *M. dabryanus* の関係性」* 石川智就、木本颯 (越谷北高等学校)
- 「アライグマの爪痕調査と地理的分析」* 山田拓海 (埼玉県立越谷高等学校)
- 「アメリカザリガニ *P. clarkii* が環境に与える影響力」* 山口広夢、伊藤貫司、米倉泰地 (越谷北高等学校)
- 「半寄生植物ヤドリギの研究」* 野呂太一、上手幸大、三田村英 (北海道北広島高等学校)
- 「越谷北高校周辺の水生物を探る」* 角田柊、川上瞭 (越谷北高等学校)
- 「チームアライグマの活動成果～各校の外来生物に関する研究概要～」* 清水花衣 (埼玉県立川越女子高校)、黒石あかり、大澤夏実、高橋和秀、前田夕里花、菅原翔英、千葉柚乃、須賀亮輔、米山夏葵 (埼玉県立越谷北高校)

英語口頭発表賞受賞者

< Animal Ecology & Animal-Plant Interaction >

【Best Award】

"Effect of seawater warming on the rocky intertidal surfgrass community" * 山口遥香 (北大・環境科学)、仲岡雅裕 (北大・FSC)

【Excellent Award】

"How are bird population trends affected by climate change?" * WANG, Wen-chien, Chen, I-Ching (Cheng Kung Univ.)

< Behavioral Ecology >

【Best Award】

"Causes and consequences of morphological variation in animal artefacts" * Shoko SUGASAWA, Barbara Klump, James St Clair, Christian Rutz (Univ. of St Andrews)

【Excellent Award】

"Extended mutualism: termite gut symbionts contribute to nest hygiene" * Tatsuya Inagaki, Kenji Matsuura (Kyoto University)

< Evolution >

【Best Award】

"Parental analysis of seeds from the wild population suggests overdominance rather than disassortative mating as the evolutionary maintenance mechanism of distyly in *Primula kisoana*" Arima Kurumi (Kyoto University), *KYOGOKU Daisuke (Ryukoku University), Nakahama Naoyuki (University of Tokyo), Suetsugu Kenji (Kobe University), Ohtani Masato (University of Hyogo), Ishii Chiyo (Kiryu Nat. Sanctuary), Terauchi Hiroshi (Kiryu Nat. Sanctuary), Terauchi Yumiko (Kiryu Nat. Sanctuary), Isagi Yuji (Kyoto University)

【Excellent Award】

"The effects of spatial interactions on an oscillatory tragedy of the commons" * Yu-hui LIN, Joshua S. Weitz (Georgia Tech)

< Biodiversity >

【Best Award】

"Elevational patterns and hierarchical determinants of biodiversity across microbial taxonomic scales" * CHIH-FU Yeh (Univ of Helsinki, National Taiwan Univ), Jianjun Wang (Univ of Helsinki), Janne Soinen (Univ of Helsinki)

【Excellent Award】

"Complex interactions between host plant and multiple fungal guilds in a subtropical forest" * Pu JIA (Sun Yat-sen Univ., Univ. of Toronto), Yongjian CHEN (Sun Yat-sen Univ.), Marc CADOTTE (Univ. of Toronto), Wensheng SHU (Sun Yat-sen Univ.)

< Conservation & Ecosystem Management >

【Best Award】

"Reassembly of soil fungal communities under plant diversity restoration" * 辰巳晋一 (横浜国立大学、トロント大学)、松岡俊将 (兵庫県立大学)、藤井沙織 (アムステルダム自由大)、小林真 (北海道大学)、大園享司 (同志社大学)、Isbell Forest (ミネソタ大学)、森章 (横浜国立大学)

"Citizen science reveals the recent expansion and a potential native predator of the invasive slug *Limax maximus* in Hokkaido, Japan" Yuta MORII (Hokkaido Univ), Nakano Takafumi (Hiroshima University)

< Plant Ecology & Nutrient Cycling >

【Best Award】

"A mechanism underlying tree species turnover along a soil P gradient in Panama: Do tree species change rank in growth rate between low and high P soils?" *Ryota AOYAGI, Klaus Winter, Richard Condit, Benjamin Turner (STRI)

【Excellent Award】

"Soil microbial communities associated with each step in nitrogen transformation along a rainfall gradient in semiarid forest" *Chikae Iwaoka (Kyoto University), Takeshi Taniguchi (Tottori University), Sheng Du (Chinese Academy), Norikazu Yamanaka (Tottori University), Ryunosuke Tateno (Kyoto University)

Ⅲ. 代表理事（兼会長）と業務執行理事の選任について

2018年3月17日に2018年度第1回理事会が行われ代表理事（兼会長）業務執行理事が選任された。

1. 代表理事（兼会長）（任期2018年3月～2020年3月）
占部 城太郎
2. 業務執行理事（任期：2018年3月～2020年3月）
湯本 貴和（副会長、次期会長候補）
中川 弥智子（広報担当）
久米 篤（出版担当）
吉田 丈人（大会担当）

Ⅳ. 規則の改訂について

1. 2018年2月17日に平成29年度第4回理事会が行われ、以下の規則改定案が承認された。

一般社団法人日本生態学会大会規則 改訂案（改訂部分のみ抜粋）

（行事）

第8条 大会開催期間中に以下の各号に掲げる行事を実施する。

2. 本法人正会員（以下、正会員）・名誉会員による学術論文の一般講演（口頭発表、あるいはポスター発表）
（参加者、発表者）

第9条 大会には本大会の目的を理解し、所定の手続きを経たすべての者が参加できる。会員資格は問わない。

2. 一般講演、研究集会（以下、一般講演と研究集会を合わせて「学術セッション」という）の論文発表者は、正会員・名誉会員に限る。ただし、企画委員会、実行委員会が認めた場合、発表者の会員資格は問わない。

2. 2018年3月17日に2018年度第1回理事会が行われ、以下の規則改定案が承認された。

日本生態学会宮地賞規則 改訂案（改訂部分のみ抜粋）

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
日本生態学会大島賞規則 改訂案（改訂部分のみ抜粋）

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則 改訂案（改訂部分のみ抜粋）

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金5万円を贈呈する。

V. 書評依頼図書（2017年10月～2018年3月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 鷲谷いづみ著「大学1年生のなっとく！生態学」(2017) 175pp. 講談社 ISBN:978-4-06-153897-9
2. 小池洋一・田村梨花編「抵抗と創造の森アマゾン 持続的な開発と民衆の運動」(2017) 336pp. 現代企画室 ISBN:978-4-7738-1722-5
3. 大園享司著「生き物はどのように土にかえるのか」(2018) 208pp. ベレ出版 ISBN:978-4-86064-533-5
4. 中静透・菊沢喜八郎編「森林科学シリーズ 森林の変化と人類」(2018) 258pp. 共立出版株式会社 ISBN:978-4-320-05817-0
5. 日本生態学会北海道地区会編「生物学者、地球に行く」(2018) 228pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-7107-9
6. ジュールズ・ハワード著 中山宥訳「動物学者が死ぬほど向き合った「死」の話 生き物たちの終末と進化の科学」(2018) 356pp. フィルムアート社 ISBN:978-4-8459-1638-2
7. 遠藤秀紀著「有袋類学」(2018) 280pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060254-9

Ⅵ. 寄贈図書

1. 「草と緑 Vol.9」(2017) 56pp. 特定非営利活動法人緑地雑草科学研究所
2. 「海洋地質図 No.89 響灘海底地質図」(2017) CD 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
3. 「北海道爬虫類両棲類研究報告書 VOL.005」(2018) 40pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
4. 「ハープソン Hokkaido2015-2017 結果報告書」(2018) 28pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
5. 「うみうし通信 No.94」(2017) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 遠山椿吉記念 食と環境の科学賞

①日本を拠点に活動する個人の研究者または研究グループ。今年度の重点課題は「食品の安全」「食品衛生」「食品の機能」「食品媒介の感染症・疾患」「生活環境衛生」にかかわる研究です

②賞金 100 万円

③6月30日(消印有効)

④一般財団法人東京顕微鏡院 公益事業室「遠山椿吉賞」運営事務局

(2) 公益財団法人住友財団 2018 年度 環境研究助成

①一般研究：環境に関する研究(分野は問いません)、課題研究：「地域固有の環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」

②総額1億円(一般研究:1件当たり最大500万円、課題研究:1件当たり最大1,000万円)

③データ送信の締切:2018年6月7日(木)必着

郵送書類の締切:2018年6月30日(土)必着

④公益財団法人 住友財団

(3) 公益財団法人住友財団 2018 年度 基礎科学研究助成

①理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。「若手研究者」(個人またはグループ)

②総額1億5,000万円(1件当たり最大500万円)

③データ送信の締切:2018年6月7日(木)必着

郵送書類の締切:2018年6月30日(土)必着

④公益財団法人 住友財団

(4) 公益財団法人長尾自然環境財団

平成30年度研究者育成支援プログラム(CGF)

①主にアジア・太平洋地域の途上国における野生動物の保護や生態系の保全に貢献する調査研究を助成する。対象者は40歳未満で前述の地域・国に国籍を持ち、現在対象国内の研究機関で研究に従事し、相応の研究業績を持つ研究者(プロジェクト・サイエンティスト:PS)。PSの研究を理解し、PSの所属機関等とも協力が可能であり、かつPSを指導する日本の研究機関等に所属経験を持つ研究者(プロジェクト・コーディネータ:PC)との共同提案とする。

②年間の助成総額2,000万円。1件当たり150万円を上限とする。

③締切は年2回:平成30年7月31日必着、平成31年1月31日必着

④公益財団法人長尾自然環境財団

(5) 第10回(2018年度)とうきゅう環境財団社会貢献学術賞

①日本の環境分野において学術的かつ社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者(個人・共同・団体、外国籍(国内で研究されている方)、但し企業は除きます)。

②賞状および賞金100万円

③2018年8月31日(金)必着

④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

(6) 第27回木原記念財団学術賞

①生命科学分野の50才以下(平成30年9月30日締切日現在)の国内の研究者で、高い基礎研究レベルを持つ優れた独創的研究であって、すでにインパクトのある研究成果を上げつつも今後のさらなる発展が大きく期待できる研究を行っている方。

②賞状及び賞金200万円

③平成30年9月30日(消印有効)

④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書評

奥田敏統編(2017)「温暖化対策で熱帯林は救えるか 住民と森林保全の相利的な関係を目指して」文一総合出版 208pp. ISBN:978-4-8299-6529-0 定価2700円(税込)

大胆な問いがタイトルとなっている本書だが、そのねらいは編者による序論に端的に述べられているので、引用する。

この問いにネガティブな意見を投げかけることが本書の意図するところではない。むしろ、炭素の一大貯蔵庫と生物多様性の宝庫である熱帯林の保全を、いかに長期的に維持していくかというグローバルスケールでの喫緊の課題について、「温暖化対策」、「住民便益」そして「生物多様性の保全」という視点から再考することが本書のねらいである。

したがって、タイトルの中の救われるべき「熱帯林」とは、生態系としての熱帯林のみならず、そこを生活の場とする住民たちを含んだ社会—生態システムとしての熱帯林であると読める。一方で、本書の副題は「住民と森林保全の相利的な関係を目指して」であり、そこでは人間社会システムと生態システムとしての熱帯林が切り離されて対比されている。以上を要約すれば、「温暖化対策」、「住民便益」、「生物多様性の保全」のすべてを達成するのが理想で、そのための道を探るのが本書の目的なのだと思われた。

生物多様性保全や温暖化対策をめぐる国際政治の舞台では、先進国と熱帯林を持つ発展途上国の間には対立が

ある。たとえば、2010年10月名古屋で開催された「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」における「愛知目標」の採択に際しては、地球上の全陸地面積に対する保護地域面積の割合を15%としたい途上国と20%としたい先進国が対立し、最終的には両者の中間の17%とされた（本書第2章第1節）。これだけ見ると自然保護第一の立場からすると先進国が善、途上国が悪である。しかし、そもそも世界の森林減少の8割は農地の拡大が原因であり、農産物を大量に輸入している先進国は、途上国における森林減少を「輸入」していることになる（1章2節）。これはグローバル化した世界経済システムの帰結ではあるが、国際社会における経済的優位性を手放そうとしない先進国の貪欲さが諸悪の根源と言えるかもしれない。

さらに事態が複雑なのは、途上国内部においても政府と地域住民の間にしばしば対立があることである。本書では以下のような例が紹介されている。ミャンマーのバゴー山地ではイギリス植民地政府の「科学的林業」とカレン人の焼畑耕作の間に軋轢があったという（2章2節）。現在のバゴー山地には地域住民の森林利用と政府による林業を両立させるための「保護林」制度があるが、現実には植栽木が盗伐され森林が劣化している（2章4節）。インドネシアのジャワ島では住民がこれまで自由に利用していた森林を国立公園に編入したので、公園管理事務所は村人と協議を重ねて森林再生を進めようとしている（2章3節）。マレーシア半島部では、森林伐採から独占的に利益を受ける政府と伐採業者に対し、アブラヤシ農園入植地の農民が不公平感を持っていることが示唆される（3章2節）。

また、「温暖化対策＝炭素貯蔵」と「生物多様性の保全」は必ずしも両立しない。炭素貯留だけを目的とするなら単一樹種を植林すればよいが、これは生物多様性の保全にはあまり貢献しない。農耕地に植林した結果、農耕地が移転して別の森林を消失させてしまう場合もある（リーケッジ、1章1節）。また、植林地は森林火災や大規模開発などに脆弱なため、非持続性という危険をはらむ。

人間社会の側には国際社会における先進国と途上国の対立と途上国内部における政府と地域住民の対立があり、熱帯林生態系の側には「温暖化対策＝炭素貯蔵」と「生物多様性の保全」の対立がある。このような様々な対立がある中で、「温暖化対策」、「住民便益」、「生物多様性の保全」という目標すべてを達成するのは、途方もなく困難な道である。その中で可能性を感じたのは、先進国やNGOなどが地域コミュニティと結ぶ保全契約（1章2節）やエコツーリズム（3章1節）である。これらは基本的に現存する原生的森林の破壊をそれ以上進めないで上記3つの目標をすべて達成しやすいだろう。しかし、すでに森林破壊が大きく進んだ状況ではどうしたらよいだろうか。本書の最後（3章2節）には森林保全と地域経済の発展の二項対立を緩和する試みとして、アブラヤシ農園内の小河川を連結する緑の回廊プロジェクトが紹介される。面積的にはわずかなので温暖化対策としてはほぼ無力であろうが、生物多様性の保全にはそれなりに効果がありそうだ。

（鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎）

一般社団法人日本生態学会 役員・代議員・委員一覧

代表理事 （会長）	占部城太郎	2018.3～2020.3
業務執行理事 （副会長・次期会長候補）	湯本 貴和	2018.3～2020.3
（専務理事）	陀安 一郎	2017.3～2019.3
（庶務担当）	木庭 啓介	2017.3～2019.3
（会計担当）	北村 俊平	2017.3～2019.3
（広報担当）	中川弥智子	2018.3～2020.3
（出版担当）	久米 篤	2018.3～2020.3
（大会担当）	吉田 丈人	2018.3～2020.3
理事 （2018.3～2020.3）		
	巖佐 庸	丑丸 敦史
	内海 俊介	大澤 剛士
	佐竹 暁子	鈴木まほろ
	陶山 佳久	東樹 宏和
	中野 伸一	西廣 淳
	宮下 直	可知 直毅
監事	岡部貴美子	2017.3～2019.3
	粕谷 英一	2018.3～2020.3
代議員 （2017.12～2019.12）		
全国代議員	相場慎一郎	巖佐 庸
	内海 俊介	占部城太郎
	大澤 剛士	粕谷 英一
	川北 篤	工藤 岳
	五箇 公一	佐竹 暁子
	陶山 佳久	瀧本 岳
	東樹 宏和	中野 伸一
	西廣 淳	
地区代議員	岸田 治（北海道）	
	鈴木まほろ（東北）	
	赤坂 宗光（関東）	
	北村 俊平（中部）	
	丑丸 敦史（近畿）	
	宮竹 貴久（中国・四国）	
	矢原 徹一（九州）	
Ecological Research 編集委員会		
Editor-in-Chief		仲岡 雅裕
Deputy Editor-in-Chief		陶山 佳久
Associate Editors		
in-Chief	伴 修平	半谷 吾郎
	松浦 健二	三木 健
	中村 誠宏	小野田雄介
	大塚 俊之	富松 裕
	露崎 史朗	山浦 悠一
	木庭 啓介	鏡味麻衣子
	小杉 緑子	宮澤 真一

玉木 一郎
 Bo Li
Handling Editors
 江成 広斗
 濱村奈津子
 平田 竜一
 兵藤不二夫
 角谷 拓
 菊沢喜八郎
 工藤 岳
 牧野 渡
 松尾奈緒子
 村上 正志
 大橋 瑞江
 佐藤 一憲
 佐藤 拓哉
 横川 太一
 西村 欣也
 阪口 翔太
 市栄 智明
 仲澤 剛史
 石川 尚人
 Min Cao
 Franck Courchamp
 Jingyun Fang
 Jan Frouz
 Rhett D. Harrison
 Sun-Kee Hong
 Eun-Shik Kim
 Andrew Lohrer
 E. Ashley Steel
 Zhijun Ma
 Ariel Noveplansky
 Sergio R. Roiloa
 J.J. Piggott
 Ming Dong
 Stephanie A. Bohlman
 福井 大
 半場 祐子
 日浦 勉
 飯島 勇人
 梶 光一
 北村 俊平
 工藤 洋
 小林 真
 松崎慎一郎
 中路 達郎
 長田 典之
 山尾 僚
 瀧本 岳
 上條 隆志
 岡部貴美子
 斎藤 琢
 松井 一彰
 大澤 剛士
 稲垣 善之
 Jae Chun Choe
 Stuart J Davies
 Yunting Fang
 Raghavendra Gadagkar
 Brenden Holland
 David W. Inouye
 Mathew A. Leibold
 Jeremy T. Lundholm
 Arndt Telschow
 Tsewang Namgail
 Pil Sun Park
 Stephen D. Sebestyen

日本生態学会誌編集委員会 (2017.1 ~ 2019.12)

編集委員長 伊東 明
 編集幹事 安房田智司 永光 輝義
 名波 哲
 編集委員 相場慎一郎 大澤 剛士
 岡野 隆宏 鏡味麻衣子
 笠原 玉青 草刈 秀紀
 古賀 庸憲 小林 剛
 今藤 夏子 島野 光司
 白川 勝信 高田 宜武
 土田 浩治 東樹 宏和
 戸丸 信弘 中川弥智子
 箱山 洋 肘井 直樹
 嶺田 拓也 三宅 崇
 村岡 裕由 村上 貴弘
 山浦 悠一 和穎 朗太

保全生態学研究編集委員会 (2018.1 ~ 2020.12)

編集委員長 小池 文人
 編集幹事 西廣 淳 佐々木雄大
 編集委員 天野 達也 岡野 隆宏
 五箇 公一 戸田 光彦
 曾我 昌史 丑丸 敦史
 金子 信博 高田まゆら
 鈴木 覚 露崎 史朗
 河口 洋一 立原 一憲
 岩井 紀子 北村 亘
 小池 伸介 岸本 康誉
 佐伯いく代 今藤 夏子
 石濱 史子 横溝 裕行

自然保護専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長 吉田 正人：環境政策
 (自然公園／種の保存法)
 副委員長 和田 直也：中部
 幹事 須賀 丈：中部
 地区選出委員
 露崎 史朗：北海道
 紺野 康夫：北海道
 星崎 和彦：東北
 黒沢 高秀：東北
 亘 悠哉：関東
 奥山 雄大：関東
 野間 直彦：近畿
 中井 克樹：近畿
 井上 雅仁：中国・四国
 伊谷 行：中四・四国
 逸見 泰久：九州
 伊澤 雅子：九州
 内貴 章世：九州
 増沢 武弘：高山・亜高山
 竹門 康弘：陸水
 加藤 真：海洋
 清水 善和：島嶼
 久保田康裕：熱帯・亜熱帯
 横畑 泰志：寄生生物
 阿部 晴恵：遺伝子
 常田 邦彦：鳥獣管理
 竹中 千里：大気汚染
 矢原 徹一：海外渉外
 村上 興正：環境政策 (外来種)
 安溪 遊地：エネルギー問題
 角野 康郎：湿地
 水谷 瑞希：MAB
 神山 智美：環境法

将来計画専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長 佐竹 暁子
 辻 和希 巖佐 庸
 粕谷 英一 酒井 章子
 奥田 昇 五箇 公一

中丸 麻由子	健太
立木 佑弥	逸郎
北島 薫	健
塩尻 かおり	真一
黒川 紘子	幸毅
山道 真人	秀幸
佐藤 拓哉	隆之
	麻乃

生態学教育専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長	畑田 彩	
副委員長	中田 兼介	
非教育学部系枠		
	嶋田 正和	西脇 亜也
教育学部系枠		
	平山 大輔	丑丸 敦史
	三宅 崇	
高校教員枠	広瀬 祐司	中井 咲織
	宮田 理恵	
博物館枠	澤邊(中村)久美子	小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長	大手 信人	
	石原 正恵	伊東 明
	内海 俊介	黒川 紘子
	木庭 啓介	中野 伸一
	中村 誠宏	松崎慎一郎
	村岡 裕由	

生態系管理専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長	鎌田 磨人	里山・協働
副委員長	西廣 淳	河川・湖沼・防災
幹事	橋本 佳延	里山林・草原・協働
幹事	西田 貴明	協働・制度設計
	角野 康郎	湖沼・河川・湿地
	古賀 庸憲	海洋
	塩坂比奈子	普及
	白川 勝信	湿原・草原・協働・制度
	高村 典子	陸水
	竹門 康弘	河川
	津田 智	草原・湿地
	富田 涼都	環境社会学
	中越 信和	景観生態
	中村 太士	河川
	日鷹 一雅	水田・農業生態系管理
	平吹 喜彦	震災復興
	逸見 泰久	渚・海洋
	正木 隆	森林・林業
	松田 裕之	野生生物管理
	村上 興正	自然保護
	谷内 茂雄	流域管理モデル
	矢原 徹一	保全生物学
	山下 慎吾	河川
	山田 俊弘	森林

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

岸田 治	塩尻かおり
土居 秀幸	井鷲 裕司
北島 薫	東樹 宏和

大会企画委員会

委員長	土居 秀幸	
副委員長	内海 俊介	
運営部会	幸田 良介	直江 将司
	關 義和	酒井陽一郎
	立木 佑弥	田邊 晶史
	小池 伸介	
(Web)	末次 健司	斎藤 琢
(広報)	岸本 (莫) 文紅	岸田 治

シンポジウム部会

吉田 勝彦	加茂 将史
川西 基博	伊藤江利子
川西 亮太	境 優
池川 雄亮	上田 実希
小柳 知代	西嶋 翔太
太田 民久	吉田 智弘

発表編成部会

下野 綾子	依田 憲
高見 泰興	小泉 逸郎
吉岡 明良	福井 大
北西 滋	小沼 順二
伊津野彩子	

ポスター部会

近藤美由紀	竹内 勇一
末次 健司	赤坂 宗光
伊藤 健彦	岡本 朋子
加藤 知道	野田 響
北条 賢	高橋 一男
澤田 佳宏	長田 典之

高校生ポスター部会

水澤 玲子	栗山 武夫
山村 靖夫	宮田 理恵
三宅 崇	岡本 朋子
馬場 友希	櫻井 麗賀
佐藤 拓哉	椿 玲未

英語口頭発表部会

黒川 紘子	石川 尚人
彦坂 幸毅	潮 雅之
前野ウルド浩太郎	飯田 佳子
山道 真人	藤井 佐織
天野 達也	高須賀圭三

野外安全管理委員会

委員長	鈴木準一郎	2018.4 ~ 2020.3
	粕谷 英一	2018.4 ~ 2020.3
	石原 道博	2018.4 ~ 2020.3
	北村 俊平	2018.4 ~ 2020.3
	大館 智志	2017.4 ~ 2019.3
	飯島 明子	2017.4 ~ 2019.3

奥田 昇 2017.4 ~ 2019.3

キャリア支援専門委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長	宮下 直	
副委員長	上野 裕介	木村 恵
	河内 香織	小柳 知代
	小山 耕平	鈴木 智之
	鈴木 牧	曾我 昌史
	高村 典子	中坪 孝之
	中村 俊彦	西田 貴明
	沼田 真也	水野 晃子
	森田健太郎	

オブザーバー

可知 直毅	黒瀬奈緒子
塩尻かおり	富田 基史
半場 祐子	深谷 肇一
別宮 (坂田) 有紀子	三宅 恵子

電子情報委員会 (2018.4 ~ 2020.3)

委員長	久保 拓弥	
	大澤 剛士	富田 基史



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

平成30(2018)年度センター活動予定

生態学研究センターにおける平成30年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、連携機関である総合地球環境学研究所(地球研)との共同企画プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会-生態システムの健全性」(研究代表者:奥田 昇)、および「自然条件下における生物同調現象」(研究代表者:工藤 洋)(科学研究費補助金、基盤研究S)が進められている。これらのほか、JST 戦略的創造研究推進事業(CREST)(1件)・(さきがけ)(2件)、環境省環境研究総合推進費(1件)、科学研究費助成事業による研究(38件)、民間財団寄付金による研究(10件)なども進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業(次頁の表を参照)

平成30年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、8件の共同研究(共同研究a)、4件の研究集会、3件のワークショップを採択した。研究集会とワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度(第三金曜日)センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室(会場への道順は、センターのホームページ参照)の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回(7月、11月、3月)発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置(熱分解型元素分析計)、GC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus

と、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、元素分析計、GC/Cを装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種

植栽林園、林木群集実験植物園、CERの森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：木庭

観測船関係：合田

シンバイオトロン関係：高林

実験圃場林園関係：酒井

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 30 年度 共同研究・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧

申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
近藤竜二	福井県立大学 海洋生物資源学部	共同研究 a	大型ミジンコ "ノロ (Leptodora kindt)" の単離と培養
杉本亮	福井県立大学 海洋生物資源学部	共同研究 a	硝酸イオンの高精度同位体測定手法を用いた沿岸海域の生物生産・物質循環研究
春日郁朗	東京大学大学院 工学系研究科	共同研究 a	湖沼生態系における細菌群集と溶存有機物分子組成との相互関係の評価
嶋田正和	東京大学大学院 総合文化研究科	共同研究 a	サイカチマメソウムシの EST-SSR マーカーを使用した父性解析及び地域個体群遺伝組成の解明
槻木玲美	松山大学 法学部	共同研究 a	古陸水学的手法と遺伝子解析技術を駆使した過去 100 年にわたる微生物間の相互作用の解析
高野宏平	長野県環境保全研究所 自然環境部	共同研究 a	ナベクラザゼンソウを始めとするサトイモ科植物の送粉生態の解明
荒木希和子	立命館大学 生命科学部	共同研究 a	次世代へ継承される植物の環境応答の分子基盤に関する研究
清水（稲継）理恵	Evolutionary and Ecological Genomics, Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	異質倍数体植物の環境適応のフィールドでの表現型解析
西野麻知子	びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ学科	研究集会	スウェーデン Vega 号採集による日本産標本にもとづく 140 年前の生物多様性復元
柴田英昭	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター	研究集会	国際長期生態学研究ネットワーク (ILTER) シンポジウム
宮竹貴久	岡山大学大学院 環境生命科学研究科	研究集会	異なるマクロ生物学分野のインタープレイ
宇野裕美	京都大学 生態学研究センター	研究集会	生物移動およびそれに伴う生態現象とその研究手法の整理
木庭啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒同位体比測定法ワークショップ 2018
中野伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曾川
木庭啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2018

センター関係者の動き

- 1) 川北 篤准教授が、3月31日付で退職しました。
- 2) 研究員の鈴木 俊貴氏、門脇 浩明氏が、3月31日付で退職しました。
- 3) 平成30年度の機関研究員は、辻 かおる氏、辻井 悠希氏、福島 慶太郎氏（6月より）の3名です。
- 4) Marc T. J. Johnson 氏 — (トロント大学・准教授) が特別招へい准教授として4月16日～6月15日滞在予定です。
- 5) Li Renhui 氏 — (中国科学院水生生物研究所・教授) が、特別招へい教授として7月20日～8月20日滞在予定です。
- 6) 菅野 陽一郎氏 — (コロラド州立大学・助教授) が、招へい研究員として5月1日～7月31日滞在予定です。
- 7) Ananya Popradit 氏 — (バラヤアロンコルンラジャバット大学・講師) が、招へい研究員として6月1日～8月31日滞在予定です。
- 8) Erik A. Hobbie 氏 — (ニューハンプシャー大学・教授) が、招へい研究員として9月1日～11月30日滞在予定です。
- 9) Biva Aryal 氏 — (トリブバン大学・講師) が招へい研究員として11月1日～平成31年1月31日まで滞在予定です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費*	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員(一般)	9500円	○	○
正会員(学生)	6500円	○	○
賛助会員	年会費 20000円/22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- ・Ecological Research 8000円
- ・日本生態学会誌 600円**
- ・保全生態学研究 2000円**

**非会員に向けた学会誌(冊子体)の定期購読料は、以下の年額となります。

- ・日本生態学会誌 9,000円
- ・保全生態学研究 5,000円

保全生態学研究は発行の2年後にオープンアクセスとなります。

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@bunken.co.jp

Tel: 03-5937-2721 Fax: 03-3368-2822